

---

**空紅** ~ KaratekaGirl-KURENAI ~

LuckRuci

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空紅 〈Karateka Girl - KURENAI〉

### 【Nコード】

N4237T

### 【作者名】

L u c k R u c i

### 【あらすじ】

空手を続けようかどうか「考えようとしなさい」、陸田コウ。だ  
けに確かに悩んでいる。

傲慢の空手を武器に未来の大学推薦を有利に進めたい弓槻ベニ。  
お兄ちゃん、キモい。

コウとベニ。

同じく「紅」の字を持つ女の子。

高校伝統派空手競技を舞台に、二人の女の子が青春時代を奔走するガールリー&コミカル！

## ぶろろーぐ(前書き)

作中に登場する『宵蝉館』という実戦空手流派はフィクション上の産物です。実在しません。

## ぶるるーぐ

「あれ？」

午後の部になって中学生中国人空手家少女、劉紅リュウホンが演舞用のマットに上がる姿を眺めていた陸田コウはのんびりとその感想を口にした。

「なんかホンちゃん、背え伸びてない？ 三十分前より。二十センチくらい」

もちろんそんなことあるはずがないのはコウにもわかっていた。劉紅はコウよりも小さい、150センチ台の女の子なのである。

しかし、思わず大袈裟に言ってしまうほどに今の劉紅のオーラ（そんなもの）が偉容に見えた。ライバルのオーラが見えるとか、あたしかつけえなとか思いつつ、演舞前にお辞儀する劉紅の姿を目で追う。間もなくショートカットの中国人少女はマットの中央へ、悠然と歩み始めている。

「やっぱ迫力あるなあ」と、コウは小声で笑い、「殺気とか、そんなの出てるのかな？ あたし、今回も負ける負けるう。絶対勝てない」歌うように断言した。

東北地方の市立体育館。

同じフロア上で股関節の柔軟をしながらくちやべるコウに、隣で立っていた同じ道場のタケちゃんコーチが答えてくれた。

「わからないぞ。劉紅が《観空大》の最後で盛大によるけるかも」柴犬のように素朴な笑顔で前向きなのか後ろ向きな他力本願なの

かよくわからないことを言っている。「何それ、あたしのことじゃん」とコウは笑いながら返した。タケちゃんコーチは「お前はよくコケる分、転び方がとても上手い」と誉めてきた。なんだそれ、とコウは両膝を上下させる。

この、ひきしまった筋肉と爽やかな童顔を持った男子大学生とも今週で離ればなれかと思うとコウは微妙に変な気持ちになった。コウはタケちゃんコーチの胸板が好きで、よく胴着の上からベタベタ触っては道場の柳谷師範に「フテイモノ」と拳骨をもらった。太え者？ あたしって結構理想的な体型じゃないかなあ、爺ちゃん視力落ちたの？ と自分のルックスを特に疑っていなかった女子中学生に「たぶん不貞者だろ」と漢字を教えてくれたのもタケちゃんコーチだ。

そんなフテイモノの陸田コウは、体育館の中央に敷かれた空手マツトの方へ細い首を伸ばしながら「おや」と言う。

劉紅がなかなか演技を始めないみたいだ。

隣の中学校に通っていた天才空手家少女は発泡材で組まれたブルの敷物に立ち、床の方を気にしているように見えた。

すぐにスーツ姿の、型の演舞に点数を付ける審判団の一人が黒靴下でマツトに上がってくる。と言うか、コウの道場の柳谷師範だ。そして、近くの空手少年に渴いた雑巾を持ってくるように指示している。

その様子を遠巻きに眺めながらタケちゃんコーチは笑い始めた。

「さつきコウちゃんが《チャタンヤラクーシヤンク》やって潰れかけた場所じゃないか」

「なるほど、あたしの汗か」

コウは間延びした台詞で手をパチンと叩いたあと、「南無南無」と拝むかのように両手を合わせ続けた。「どうかあたしの汗がホントちゃんの足を引っ張りますように」と。願い終わらぬうちに空手マツトに残った汗粒は地元の男子小学生にゴシゴシ拭き取られてしま

「コウちゃんはやっぱり劉紅に勝ちたかったか？」

タケちゃんコーチが隣に腰を下ろしてきた。さつき組手の試合で大暴れしていたわりにはまったく汗臭くなく、前髪もおしゃれでサラサラだ。胴着から覗いた胸板に触りたくなっただが、今日は会場にタケちゃんコーチの彼女が来てるらしいので我慢することにした。

彼から尋ねられた言葉にコウはとりあえず、うん、勝ちたかった、と素直にうなづく。

「ママが、今日一位になればiPod買ってくれるって、約束したの。はりきってコケちまったけどな。《スーパーリンペイ》にしとけばよかった」

「お前のママさんも厳しいのな」

「ママさんって」

同情するような顔で口にした彼の言葉にコウは「んふふ」と鼻で笑う。その反応を見てタケちゃんコーチも自分の言い方を思い改めたのか照れたように上唇を掻いて、はにかんでいる。向こうでは劉紅が改めてマットに入場し、得意にしている形の名前を凜々しく叫んだところだった。タケちゃんコーチは彼女と関係ない話を続けている。

「ちよつとスナックみたいか、ママさん。でも、毎回ちゃんと二位取ってるんだから、ご褒美くれてもいいのにな。……て、人んちの事情だな。ごめん」

「優しいねえ、タケちゃん」

暇潰しだった柔軟を終えて体操座りをしていたコウは、タケちゃんコーチの脇腹に人差し指をぐりぐり押し当てて

「iPodいらさないからさ、タケちゃん、カノジョと別れちゃえよ。あたしと遠距離恋愛でもしようぜ」

「やめろって」

やめろとは、脇腹挟られることなのか、フテイモノの発言に対してなのか、男子大学生は苦い笑顔で堅い身体をよじらせている。

たぶん、後者かな。気さくで男らしい性格のくせに、こつこつこ

とではいちいち照れやすいタケちゃんコーチの様子がかわいくて彼はコウのずつとお気に入りだった。あーあー急に東京に行きたくなくなってきた。これが《センチメンタル》ってものなのかよ。

思ったままに訊くと、タケちゃんコーチはなんとも言えない笑顔でコウのポニーテールの根本をクイツと引っ張り、コウは「うう」と言い、彼はただ一言。

「センチメンタルだよ」

「決まった！」という複数の声援が市立体育館に響き渡る。

劉紅は《観空大》のクライマックス、大跳躍までを華麗に決めて、演技を終える所であった。

市内、三道場総合空手大会。

個人型、子ども・女子の部。

一位、劉紅（初段）

二位、陸田紅（二段）

以下、略。

ついでに言うと劉紅は組手部門でも優勝（圧倒的）だったのだから相当な空手少女と言えた。そのうち空手道がオリンピック種目として定着した将来は全国ニュースで見かけるかもしれない。ちなみ

に、コウは組手には出場していない。小学生時代、年下の男子に殴られて鼻血を出して以来、どうにも組手は嫌いになってしまった。

市内にある三大空手道場（師範同士がライバルらしい）が春と秋に開いている合同大会にコウが参加するのも今年で最後だ。毎年毎年、ついには代わり映えすることがなかった己の順位を今年も与えられたコウは胴着姿でポツキーをかじりながら二階の小体育館で道場の小学生が持ってきたグラップラ・刃牙と一緒に読んでいたのだが、やがて、そろそろ今大会の大目玉『組手部門・一般』の決勝が始まるので第一体育館に向かおうかと考えた。決勝に臨むのはコウの道場のジャニーズ系だった大学生、タケちゃんコーチだ。コウは勝敗よりも、対戦相手が刃牙の漫画に出てくる夜叉猿（さつき読んではた部分に登場してたゴリラ。超つええ）みたいなマッチョの丸田さんだからタケちゃんコーチの可愛い顔に傷が付かないか心配だった。顔面を保護する面包装着していても場合によっては前歯が折れたりする組手がコウはやっぱりおっかない。

それでも観客席よりずっと近いフロアで応援しようと思い、コウが一階に降りると、

「お」

ちょうど階段の所に劉紅が立っていた。150と少ししかないアマリリス（コウはリスの一種だと信じている）みたいな中華少女は、168センチなんて女子中学生にしては背が高いコウのことを見上げてくる。

「……ムツダか」

例によって堅苦しい劉紅の声に、コウは「ちっすー」と軽々しく片手を挙げて返した。

二人は昔からの顔馴染みだが、別に友達ということもない。一緒に遊んだことはないし、両者とも通っている中学校に空手部が無かったので、道場の大会くらいでしか顔を合わせることがなかった。

加えて、劉紅は小動物的な外見に反して真面目で硬派な女の子だったから、ノリで生きているコウとは微妙に会話の相性が悪い。

いい加減なノリで絡まれても劉紅は迷惑しそうなので、コウはいつも通り軽い挨拶だけして第一体育館に行こうとした。すれ違ってから二秒後に、再び劉紅の声が聞こえてきた。

「東京に行くんだってな、ムツダ」

「んー？」

声をかけられると思っていなかったコウは意外に思いつつ立ち止まり振り返る。劉紅の生真面目な瞳がこちらをじっと見つめていた。コウは「いひひ」と笑うと頷いた。

「うん、来週にね。ママの実家に戻ることになったの」

説明すると、そこに立っている天才空手少女は心許ない表情を浮かべる。やがて、

「離婚でもしたのか？」と率直に訊いてきたので、今度のコウは首を横に振る。

「あれ。ホンちゃんに言っただけでなかった？　うち、オヤジは小学校の頃にポツクリしたんだ。んでね、最近はママも疲れたみてえ。家売って仕事辞めて、しばらくあっちに移るんだと」

「そうか」

「うひゃひゃ」コウが笑う。

「なんだよ、その笑い方」

「ホンちゃん、あたしが居なくなるの淋しいんだね」

「うん。少し」

あっさり返されて、コウは逆に目を丸くする。実は愛されてたのかな。まあ、もしも劉紅に告白されたのなら期間限定でレスに転向してあげてもいいかも。抱き心地良さそうなサイズだしな。そんなことをコウが半分くらい本気で考え始めていると、向かいで劉紅は本音を述懐しているようだった。

「あたしは、ムツダと型を競うの楽しかったぞ。いつか負けそうでもいつも緊張してたと言うか。お前の演技は少し荒っぽいけど、パワーがあつて、その、結構、好きだったな」

もしかしたら彼女は相手に感想を伝えるのが苦手なのかもしれない

い。俯き、耳を赤くしていた。

彼女の様子を見ていて、コウは、なんか、ちょっときた。

「ねえホンちゃんキスしていいかな？ 舌いれちゃう？ 付き合おうよ。遠距離恋愛になるけど」

もうレズでもいいや、と思いつながらコウが近寄っていくと劉紅は露骨に疎ましがな顔を浮かべている。

「イヤダ。バツカじゃねえの、お前。下品」

「バカもバカなりに本気なんだって」

と言いつつ、さすがに本気ではないので、コウはチビな中国人の首に素早く腕を回すとマウスとウマウスではなく頬に唇をぎゅっと押し当てた。中学校の修学旅行では仲良し連中と酒盛りして悪酔いして記憶を無くし翌日に女子一同から「このキス魔テロリスト（極右翼）が」とウザがられることになったコウには、この手の行為に対する抵抗感がまったくないのだ。ただ、劉紅が「げっ」と心の底から嫌そうにしていたことは、ややショックだ。おまけに手の甲で拭いもしやがりました。

「ムツダと違う学校で良かった」

「ひっでー」

コウは笑ったあとに、一つ思い付いたことを言う。

「そうだ。ホンちゃん、携帯持つとる？ アドくれ」

伝えたあとに、実は劉紅が下げている右手に最初から携帯電話を持っていたことに気付いた。メタリックピンクで、ソフトバンクの白犬お父さんがくっついている。彼女はそれを胸のところまで上げて唇を尖らせていた。何やら拗ねたような顔付きに見えた。

「あたしから言おうと思っただけどな……」

ちえ、って感じで言っている。実際に拗ねてるみたいだ。うおお、なんかさつきから個人的に萌えるんですけど。

「ねえねえこの後ホテル行かない？ 最後に思い出残そうよ」

「だからバカじゃねえのツ、テメエ」

テメエとか言い出して、小さな劉紅はイライラした顔でコウの脛

に回し蹴りを見舞ってくる。普通に痛かった。

「いいからさっさと携帯出せよ、ムツダ。男子の決勝始まんたる」  
「やべえ、そうだった」

決勝でタケちゃんコーチと闘う丸田さんは劉紅と同じ道場なので彼女も試合を気にするとこだろ。ぱぱっと携帯の赤外線機能を起動させたコウは、わざわざしく笑い始めた。

「ふっふっふ。オレっちは負けたけどよ、タケちゃんがカタキを討つてくれる予定なんすよ」

なんちて。オタクっぽい口調でコウが赤外線を送受信を終えた頃には、何故か劉紅が頬を赤くしていた。妙に女の子らしい手つきでアドレス交換した携帯を胸元に抱き寄せると彼女は、

「……タケちゃんって、竹久さんだよな？」  
「わかりやすい反応っすね。」

「そだよー。なんだ、ホンちゃん、丸田さん裏切ってタケちゃんフアンか」

コウがにやにやしながら突っ込むと、劉紅は渋々といった風に頷き返した。

「だって、かつこいいじゃん。別に、丸田さん裏切るつもりないけど」

「まあ丸田さん腕毛もっさりだしなー。じゃあ一緒にタケちゃん応援して終わったら帰りに三人で3Pみたいなの？」

だんだん品の無さがエスカレートしていく自分のジョークセンスに気付いてコウはうっとりした。いいね、この三段オチみたいな進行。高校入ったら下ネタ系のキャラクターで行こうかなと我ながら口くでもない青写真を描きつつ、ストレートなセクハラに劉紅がどんなりアクションを見せるのか期待もしていた。

しかし、相手はただ呆れた顔をして、

「何言ってるんだムツダ。三人で3Pって言葉が重複してるだろ」

「あ、そこすか」

予想外なのがウケて、わはっ、と声を上げると、コウは劉紅に腕

を絡ませて第一体育館へ歩き始めた。

今まで知らなかったが、この中国人とは気が合うみたいだ。こんなことならもっと早くいっばい絡んでおけば良かった。

恒例の空手大会が終わり道場の皆と焼肉屋に行った。微妙に陸田コウ送別会のような空気を醸していたので代えてテニションを高めたコウが小学生グループを伴ってプロレスショーのように暴れていると最後までやっぱり柳谷師範に拳骨を食らった。そこからわかに物悲しい気持ちになり（たぶん隠れて酒を飲んだせいだろう）ほろりと涙腺が弛み、師範に「ほんとフテイモノですんませんでした」と泣きながら何度も頭を下げて、師範に笑われてしまった。遅れて到着したタケちゃんコーチ（組手部門二連覇のイケメン）の姿を見つけるとすぐに抱きついて、さらに大声でわんわんと泣き始めた。みんな苦笑していた。

会食も終わり、母と一緒にビジネスホテルに戻ると、劉紅からメールが送られてきた。

絵文字も件名もなく、

《空手、続けるん？》

と、簡素な一文。

コウは「ホンちゃんのメール、うける」と真顔で呟きながらベッドの上に胡座をかき、思ったまま、文脈を考えることなく返信を打った。母親が「お風呂入ったら？ 汗かいたでしょ。あと焼肉臭い」と言うのでコウは「あたしの汗はフローラル。お先にどうぞー」。「はい」と母親は浴室に消えていった。メールを打ち終わったの

で劉紅に返信を送る。

《空手はわかりませーん。東京つぺえイケメン彼氏ほしいつす。タケちゃんみたいにカッキー男児発掘したいっす！ そうだな、まずはSoupの読者モデルやるうかなー。コウちゃん絶対そこらの東京ギャルよりカワイイし。いつひっひ》

なんて打つと、一分もかからずまた着信音が鳴る。

《とりあえずウゼエつす。続けなよ、空手》

母親が入浴中なので、そこからしばらくはコウもメールに集中する時間になった。

《ひどいつす！ 全然関係ないけど劉紅ってJPhoneみたいだね うがーiPodほしいーなー！ 実は今日優勝したらママが買ってくれるって話だったんじゃ。君に負けたから駄目じゃわ。この、テメエ》

《知るか（笑）なるほど。いつもより気合い入ってると思った。ムツダ、今日すごい動き切れてたしね。決勝型は一百零八やれば良かったのに。てかムツダ、跳躍の着地だけ下手すぎ。奇妙》

《むきいいいいい！ 師範に、お前のは空手じゃなくてダンスだつて言われたの思い出したワラワラ。つうか、ほんと、無理っすね。たとえノーミスでも勝てないってわかってるしね、君には。だから、もう満足したかも。コウちゃん先生の次回作に御期待ください》

《んー、そっか。話変わるけど、ムツダ、いつ出発？ 空いてたら見送り行ってあげる》

《おお！ ありがとー。来週火曜日の朝9時頃に北米代駅からだぜ。そのまま二人で大阪に駆け落ちしようぜ。いっぱい子ども作るうぜ》

《日時は了解だぜ。たぶん行く。いいな、東京。おやすみ》

バスルームから戻ってきた母親は、ベッドに寝そべってポツキ―をかじりながらバラエティ番組を観賞していた娘の姿を見つけない目を細めている。シャワーを浴びている間に何か思い出したかのような顔だった。

「高校つて、空手部あるらしいね」

それだけだった。さっきまで劉紅と交わっていたメールをリフレインするかのような言葉に、少し食傷気味の感覚を抱いたコウは「へえ」と一言返し、ポツキ―をもう一袋開ける。

母は「入るの?」と訊いてくる。

娘は「お風呂にはね」と答えた。

「ま、あんたの自由だけど。でも、柳谷先生言ってたんだよね。コウが道場辞めるの残念だーっ、て。酔った勢いかもしれないけど」「それ酔った勢いだよ、ぜってえ」コウはベッドの上で足をバタバタさせた。「だってあたし、師範にすっげ邪魔者扱いされてたし。やかましい、やめちまえ、フザけるならもう来んな、って」「だって、そりゃあんた、不真面目だもん。やめてよ、高校で問題起こすの。先生に呼び出しか、めんどくさいから」

パールホワイトに輝く似非シルクのようなパジャマに身を包んでいる母親は、肩にかけたハンドタオルで濡れた髪の毛を撫でながら、コウの隣のベッドに腰を下ろして意味不明の溜息をついている。娘の高校生活に対する注意文言にも真剣味が感じられないし、いい加減な性格は母親からの遺伝なんじゃないだろうか、とコウはポツキ―をかじりながら考えた。

東京への移転はいささかの切なさを持っているが、コウはこれまで自分を取り巻いてきた環境に不満があるわけでもなく、高校に入ってから尾崎豊のように校舎の窓ガラスを粉砕させる心積もりもない。まあ、先のことなどわからないが。

東京の高校が田舎高校とどう違うのか細かく想像できるわけでもなし。なんだか頭の中がフラフラとしている状態だった。クラスの



出発の日、火曜日。八時半頃。

春休み中とあってか、午前の北米白駅にはわりとたくさんの人たちが陸田親子の送別に来ていた。

学校ではコウと一番仲が良かったヨっちゃん（物知りで、コウの下ネタの師範）が普段のさっぱり系クールだった相好を崩して「うえええん」と泣いていたので、コウも「うええええん」と泣いた。二人で手を取り合いながら「たまに帰ってきてね」「うん。ヨっちゃんも東京来てね」「大学、東京行くからね」「結婚しようね」「いっぱい子ども作るうね」と長々語り合っているとタケちゃんコーチもオシャレな服装でやってきた。ちょうど彼は欠伸をしているところで、そこでコウと目が合うとバツが悪そうにし、あの柴犬っぽくなる苦笑を浮かべて「よ」と言っていた。彼は送別に欠伸は失礼だと思っていたのかもしれない、でも、眠いのに来てくれたことがコウには嬉しく思えたので、いつものように大学生の腰元に抱きつくのと硬い胸板をシャツの上からベタベタ触った。なぜかヨっちゃんも触っていた。タケちゃんコーチは「オリンピックで会おうぜ」と言つて、ちよつと寒いなとコウは思ったが、「おう。スピード社製のビキニ着て待つてるぜ」とノってあげた。タケちゃんコーチは肩をすくめて、コウの襟足を引っ張った。今日のコウはポニーテールをやめて、パーマをかけた茶髪をすりと下ろしていた。

もうすっかり東京モードだ。

最後の最後に到着したのは劉紅だ。

親に車で送ってもらったらしく、白いワンボックスカーから降りた背の低い中国人少女は、上は花柄のシャツ、下はグレイのショートパンツにモスグリーンのレギンスとボーイッシュな私服に身を包んでおり、何を考えているのかわからない真顔でこちらに歩いてきた。

そして、

「じゃあな」

と一言目で言ったのでコウは吹き出してしまった。劉紅はとても不愉快そうにしていたが、肩をすくめるとコウの胸に勢いの弱い正拳を当ててきた。

「ムツダさ、そんなに空手好きじゃなかった？」

コウは空を向くようにして思案した。首をかしげて答える。

「ん、そうかもね。道場は好きだったよ」

「まあ、そういう人もいるか。昨日も言ったけど、お前いなくなるの残念だよ。ライバル、って言うのがキッぽいけど。実際、地元の大大会だと敵はムツダだけだったし。あー、今度からすげえテンション下がりそう」

「わっはっは。結婚しよう」

「そういやムツダ、全国大会とかも全然出てこなかったけど、なんでなん？」

そんなことを訊いてくる。ゼンコクタイカイ？ ああ、全国大会か、と一瞬遅れてコウは目を丸くした。

「なんでって。なして出るの、あたしが？ そんなの無理無理い」  
意味わかんない、とコウがけらけら笑うと、どうしてか劉紅は呆れた目付きで肩を顕著に落とした。

「あ、そう……。お前って結構暗い奴なのな」

「え、そう？」

暗いなんて言われたのは生まれて初めてである。表情の意味もわ

からなくなってきたし、微妙に彼女との会話も噛み合っていない気がする。道場に通っていて全国大会なんてフリーズを意識したことはまったくなかった。

詳しく尋ねてみたい気も起きたが、もう間もなく出発の時刻なので別れの挨拶をするしかない。

「東京遊びに来ることあったら言ってね。案内したげる」

「もう東京人気取りかよ」

鼻で笑った後に、劉紅は「元気だな」と握手を求めてきた。コウは握り返しながら、（格好いいと言うか、古風と言うか）やっぱり劉紅は人と少し変わっている女の子だなと思った。

「ママあ、うちの道場って全国大会なんて行かなかつたよね？」

コウがそういうことを尋ねたのは、すでに山形県を抜けて新潟県を新幹線を通っている頃になってた。

隣の席、コウと一緒にDSでぶよぶよ対戦をしていた母親は、いかにも「何言ってるんのアンタ？」という感じで、外行きの化粧を施した顔をぐるんと回してくる。

「普通にあつたって。一回だけコウも参加しに行ったから」

「うっそ。それいつ」

「えっと……、うん、確か小学校二年生の時だね。あんた行った先でゲロ吐いて出場しないまま戻ってきたのね。で、その次の年はパパが死んじゃったでしょー？ 三回目の時は、あんた、ありやないわ。そうです、ちょうど全空連の予選大会の日程って、コウの誕生日と一緒に、誕生日だから行きたくなあーってあんた言ったから柳谷先生マジギレしたんだつた。なら、行かんでイイ！ みたいなね。ほんとなんで、こんな子に育っちゃつたのやら」

母は他人事のようにキヤキヤと笑っていた。いや、他人事なのか。

言われてみれば、小学生五年生の時にどこかの大会に行く行かないだったので柳谷先生にしこたま怒鳴られた記憶はある。あれが全国大会だったのね。なんであつたか、確か、友達との誕生日パーティー（カラオケ耐久戦）を優先したんだつた、ような？

「だから柳谷先生も、大会に出たくなつたら自分から言えつて伝えたそうなんだけど、結局コウは出る機会無かつたね。まあ、急に東京戻ることにしたあたしも悪いんだけどさ。ごめんね」

謝罪するものの母は気に病んだ様子もなく「おりゃ」と言った。

急造三連鎖のジャブがベストのタイミングでコウの連鎖用の山を埋めてしまい、もうどうしようもなく負けた。油断したと言え、ぷよぷよの上手い母である。彼女はDSを持ちつつ、にやつとした横目を娘に向けてきた。

「ま、好きに生きなよ」

「そうしてる」

ぶすつとした顔で答えたコウは次の試合で十連鎖を決めてリベンジを果たした。

新幹線が関東地方に入る頃にはどちらともなくゲームに飽きて、一時間ほどコウは寝て過ごした。

目覚めて、手のひらで瞼を縦に擦り、車窓に目をやると「ここ、東京？」と呟いた。

母が「うん」と答えた瞬間に陸田コウは東京の人になった。

## 01：東京ランナーズ

たぶん兄貴が使ってたんだろ。

その日、弓槻ベニは入浴を終えて、湿った髪のままリフォームしたての和室に行くと、使うつもりだった家族共用パソコンが既に立ち上がっていた。

ラッキ、とベニは唇を動かして敷かれた座布団に腰を下ろす。短気な性格だから年季の入ったパソコンがノロノロと起動する様を見守っていると非常にイライラしてくるのだ。

起動中のディスプレイにはデスクトップの画面しか表示されていない。ベニが来たのを見計らったかのようにスクリーンセーバー画面に切り替わっている。

すぐにベニは右手で卓上のマウスを小さくズラして元の画面にし、さっそくインターネットブラウザを開いた。特に調べ物があったわけでもなかったが、この時間は母親が刑事ドラマを見るためテレビを独占しているし、ちよつとした暇潰しのつもりである。「げ。」と、すぐにベニは顔をしかめた。

「……生温かいし」

座っていた座布団がヌクヌクしているのに気付いた。直前にここに尻を置いていた人物が兄貴かと思うと途端に不快な気分が込み上げてくる。特段、兄の弓槻ソウを汚物扱いしているわけでもなかったが、どうしようもない馬鹿だと見下している。あの馬鹿と間接的にでも密着しているかと想像すれば、かなりイヤアな気持ちだった。

受験控えた三年生のくせに座布団又ルくなるまでサーフィンしてんじゃねえよ馬鹿兄貴、と内心毒づきながら座布団の裏表を逆にする。まあ、未来のベニとて三年生になりたての春から大学受験に勤しんでいる予定などありはしないが。

座布団を裏返すと一枚のメモ用紙がヒラリと舞った。

それを拾い上げるとベニは首をかしげる。

なんじゃこりゃ。

http://xxxxxxxx/xxxx

サイトのURLだ。

それにIDとパスワード。

シャープペンで殴り書きされており、結構短かったのでキータッチが不得意なベニでも簡単に打ち込むことができた。てゆうか、何のサイトかも解らないのに打ち込んだ。

十中八九とも言うか、この走り書きからは兄貴の臭いがプンプンするし。もしもエロサイトに繋がったら父さんにチクろーっと。

そんな軽いノリでベニは拾い物のサイトへと飛んだ。

リンク先は何かの情報掲示板だったらしく、軽くて、すぐにきちんと現れる。

ある意味で、エロサイトよりもいかがわしい代物が表示された。

《新入生を勝手に格付けし合う俺たちwiki》

「ENTRY」

- ・森田瞳（A組）
- ・陸田紅（A組）
- ・香里瑞恵（B組）
- ・佐々木透子（B組）
- ・船山百合子（C組）
- ・弓槻紅（C組）
- ・木村麻子（C組）
- ・光川舞（D組）
- ・国沢ほたる（D組）
- ・塔ヶ崎愛（E組）
- （決定済み、編集不可）

更新日4/7

「RANKING」

- ・恋人にしたい女
  - ・付き合ったら面倒そうな女
  - ・私生活がだらしなそうな女
  - ・口説きやすそうな女
  - ・裏表のギャップが激しそうな女
- （編集中心）

「BBS」

- ・相談板
- ・報告板
- ・雑談板

.....

……

「はあ？」

ベニはことさらに低い声を漏らす。「なにこれ、さいてー」

これがどういうものか一発で理解してしまった。

ロンブーの番組をパクってどこかのオタク男子どもが花高新入生女子をネタに盛り上がっているようである。

「キモ」

自分の名前までしつかり載ってるから本気でキモかった。個人名を出している時点でネット法？（的な何か）に明らかに違反しているだろう。

それにしても知り合いが意外に多い。同じクラスの木村麻子に、幼馴染みの船山百合子はもちろん、光川や塔ヶ崎とも中学校が一緒だ。明日学校に行ったら報告してやらないと。こんなおぞましいものがオンライン上にあるんですよ、と。とりあえずうちの糞兄貴は百パー加担してそうだから今日中に死刑だ。

自分と同じ「紅」という名前の女の子の名前を見つけて少し気になったが（なんて読むだろう？）、今はその発見以上にベニは憤慨していたので鼻の穴を膨らませながら卓上のマウスをカチカチと操作する。

サイトのBBSへと飛んだ。

「格付け相談板」

もう全部、森田瞳が一位でいいんでね？ あいつだけなんかアイドル級じゃん。性格もいらいしいし。後輩からの情報だから確実。あ、ちよつと天然入ってるらしいとのこと。はあはあ瞳たん。

私見乙。

私見って言わねーし、馬鹿乙。

小学校の頃から木村麻子に目を付けてた俺が通りますよつと。

なんとなく通報しました。

お前ら馬鹿だな。佐々木透子の草食系爆乳の魅力に気づかないとは。

女に草食って使うのか？

光川の顔好きだけど（肉食顔）アイツ背え高すぎ。なんかデートしたら俺へこみそうだわorz

安心しろ、お前らずっと童貞だ。

エントリーに俺の彼女追加したいんだけど、いいかな^^

逝ねし。

てか、雑談板必要かな？w

(過去ログの適当なあたりから下ってきているベニはこの時、呆れて開いた口が塞がらない状態だった)

リクタクレナイって誰？ ログ漁ってもいねーんだけど。

陸田紅 おのぼりさん。山形出身らしい。A組行つてギャル探せばたぶんソイツ。特徴はセミロング茶髪でピアスで長身(165くらい)。ギャル系好きな奴には人気が出そう。性格の方は未知数。たぶん尻軽。

情報サックス。あと尻軽は余計だと思つ。偏見には気を付けようよ。

ちなみに読み方はムツダコウな。

紅タンはあはあ。

透子タンはあはあ。

紅で思い出したけど、弓槻ベニってどうなん？ 俺よく知らねーんだけど、誰か情報求む。

あー。キリつとした感じつつうか硬派な顔？ ウルフヘアで合ってるかわからんが、襟足がやたら長い変なショートカット。男よりに女にモテそう。まあ人によるんじゃない？ 俺は同じ組の木村麻子みたいに猫っぽい顔の方が好き。

麻子タンはあはあ。

なるほ。弓槻ベニは格好いい系と。好きかもしんない。

いやいやいやいや、弓槻ベニはマジねーよ。つうかなんでエントリーに入ってるわけ？ あいつ性格最悪だぞ。ちよっと機嫌悪いとネチネチネチネチいやみ言うし人の携帯壊しても謝らねーし足でテレビのリモコン操作するし箸の使い方きたねーし風呂なげーし、それに顔もなんかサルみてえじゃね？ ちなみにあいつと仲の良い百合子ちゃんは癒し系。はあはあ。

お前……、弓槻ベニの関係者だろ？

どう見ても私怨。

ベニはパソコンをそのままにして立ち上がるとリビングに行きテーブルの所で優しい顔した父親に説教なり注意なりを受けていた二つ上の兄、弓槻ソウのコメカミに上段回し蹴りを食らわせた。

とてつもなく派手な音をあげて兄は椅子から転げ落ちた。あちらで刑事ドラマを視聴中の母親が迷惑そうな顔をして振り返り「ちよつとお、静かにしてよお」

そして、兄と話をしていた父親も胡麻塩っぽい眉毛を下げながら口を開いている。

「こらこら」と優しい声で「どうしたの？」

「お父さん、こいつちょっと借りるから。借りるって言っても返せるかわかんないけど」

スクラップにしてしまいかもしれない　そんなことを思いながらベニは、テーブルの脇で頭を抑えて悶絶している兄の、黒いロングティーシャツの襟を掴むと無理矢理に立たせて歩き出した。そのまま、兄の部屋まで連行する。

ドアを閉めたのと同時に兄は部屋の真ん中で振り返り、真っ赤な顔して怒鳴ってくる。

「いきなり何する！」

ベニは無言で兄のミゾオチに前蹴りを決めた。兄も無言で崩れると、やがて聞き取りにくい、蚊のような悲鳴を漏らし始めて床をのた打ち回っている。少しして悲鳴は明瞭になった。「誰だあ、誰だあ、こいつに空手なんか習わせたの！」お前だ、馬鹿野郎、とベニは吐き捨てる。その点だけはベニも兄に感謝しているが、それを上回る怒りが今の身を支配していた。

やがてベニは兄に暴力の理由を伝えた。

「新人生を勝手に格付けし合う俺たちウイキ」

そのタイトルを口にした途端、大袈裟に苦しんでいた兄はピタリと動きを止めて、怯えた感じの情けない顔を床から上に向けてくる。それから彼は慌てて自分のズボンのポケットをまさぐり、まさぐり、最後に財布を取り出して中身も確認をしていた。肩がブルブルと震えだしている。

「無い……お前、ベニ、まさか」

「落ちてたよ、パスワードの紙。ばあーか。誰が猿だよ？」

ベニはひれ伏している兄の前に屈み、右手を動かした。

ガスツ。

と音がして、兄は「うぎゃああ」と顔を覆い絶叫した。

コブシを逆さにし、人差し指と小指の一本拳により《眉間》と《人中》という顔面の急所を二つ同時に叩く、これぞ宵蝉流・逆月。出血や骨折をしないわりにめっちゃくちゃ痛いのだ。ざまあみろ。

目に涙を滲ませている兄は、苦痛を耐え忍ぶように歯を食い縛った表情をし、実戦派空手使いの妹を睨んできた。

「お前、あのサイトは女子禁制なんだぞ！ あと、俺がお前を猿つて書き込んだ証拠がどこにある！」

「なに逆ギレしてんの？ バツカじゃねえの！ だからお前はKYなんだつつうの。身内情報使いすぎて、周りもドン引きしてたじゃんよー！」

「知らねえ！ 俺じゃねえ！」

「何が百合子ハアハアよ！ あたしの友達に欲情しないでよ。さいつてー！」

「黙れ空手ゴリラ！ お前は猿じゃなくてゴリラだ！ 簡単に手えあげやがって。ちゃんと百合子ちゃんには優しくしてんだろっな」「げえ！ お前が百合子ちゃんって言うなあ！ きもきもきもいいいい！」

逆上したベニは兵器級の腕を再び動かした。妹との生活ですっかりディフェンス行為に慣れてしまった兄は両腕を巧みに使い、とっさに正中線をガードしている。

馬鹿が。人体にいったいくつの急所があると思ってるんだ。

右腕はフェイントで、ベニは今度、右足刀による内回し蹴りで馬鹿の頸動脈を高速で打撃した。兄は「かは」と言い横たわった。これは死んだかもしれないけど、知らん。

残念ながら生きていたようである。芋虫のように倒れている兄は悔しそうに言っている。

「空手しか能の無い馬鹿のくせに……」

「あんななんか勉強できても馬鹿じゃん。だっさー」

「俺の頭なら良い大学行けるからいいんだよ。それで勝ち組だ」

無農薬のモヤシみたいなキモメガネが何を勝ち誇ってるんだか。

「いいの。あたしも空手推薦で行くもん」

とベニは鼻を鳴らして胸を張った。

何を隠そうベニは実戦空手・宵蝉館の中学生チャンピオンなので

ある。自分の實力には絶対的な自信があるし、全国王者の肩書があれば一流が無理だったとしても中堅体育系大学の推薦は確実に取れるだろう、ってなものだ。成績が悪くたって良いのだ。

てゆーか、危うく本題からズレそうになっているし、一刻も早くこの不届きな兄貴をネット社会から抹殺すると共に実生活の上でも殺さなければ。ベニは兄のことを再度きつく睨み据えた。

しかし、弱いくせに復活の早い兄はすくりに立ち上がるといきなり高らかに笑い始めた。

「推薦？ お前が？ ベニい、お前はやっぱり世間知らずだなあ」

「……あによ」

兄よ、ではない。何よ、である。舌つたらずなのがベニのネックだ。

兄は爽やかぶっているつもりなのか「はは」と笑い、だっさい赤のカラーフレーム眼鏡をすちやりと上げた。

いやー！ー！ー！。きもー！ー！ー！。とベニはわざとらしく身震いしてやったが、しかし、何故か勝ち誇ってる兄は相変わらず笑いながら言った。

「高校と大学の競技空手は《伝統派》だ。お前のやってるアングラな実戦空手なんて推薦の役に立たねーよ」

「え？」

何やら理路整然としていそうな発言に、理解が追いつかなかったベニは恣意的に首を横に倒し、三年前、妹から「へっぴり腰」と馬鹿にされたことで空手を辞めたがしかし黒帯持ちである弓槻ソウは機嫌良さに笑っている。

「お前、全空連でもないマイナーなケンカ空手の黒帯しかないだろ。言っとくけどな、伝統空手だとお前なんて白帯の素人だぞ。型の一つも覚えてないだろ？ 話なんねーよ、推薦は無理。勉強しなさい」

形勢有利な顔した兄貴が他にも何かを言っていたが、ベニは理解できそうな内容を理解しようと没頭していたので大半を聞き逃してしまった。理解。理解。えーと、つまり。理解。理解。

……駄目。

「お兄ちゃん、もう一回説明して」

「ええ？ ソウ先輩が？ 私にいい？ はあはあしてた？」

学校の休み時間中、腹いせに昨日のことをチクってやると幼馴染みの百合子はのんびりと復唱し、まつ毛を伏せた。顔を赤くして、もじもじ、もじもじ、なんかちょっと嬉しそうだし。

ベニは「しまった」と舌打ちする。

「百合子、どういうことかわかってんの？ ハアハアは絶対やばいって。激ヤバ。性犯罪者の鳴き声だって。あんた夜な夜な汚されてんだよ」

「ちよつと、やめてよベニ」

昔から下ネタを嫌っているお上品なお嬢様は不愉快そうな顔して、向かいの席のベニの肩を手でやんわり押してきた。さっきよりも顔が真っ赤だ。この温室育ち臭の漂う性格がクソ兄貴の琴線に触れるらしい。

ベニは溜め息をついた。

「うちの兄貴って、キモくない？」

空気読めないし。本気うざい。昨夜も、空手のスポーツ推薦を勘違いしていたベニに「バーカ、やーい」とか、お前いくつだ？ と指摘したくなるほどしつこくからかってきたし、しまいにベニは血が出るほどに兄をボコボコにした（その時にはベニも半泣きだった）

「うああ……」

キモくない？ と百合子に質問してすぐにベニは頭を押さえて頂垂れる。

スポーツ推薦使う気満々だったのに……

兄の説明によるとベニがやっている実戦流派しかもアングラは高校競技と関係ないので中学生チャンピオンでもまったく内申点に絡んでこないらしい。

「どうやって大学に行こう。普通に勉強してか？ イヤじゃああああ。勉強嫌いじゃああああ。高校受験ですら血へド吐いて自己採点ギリギリのギリだったのにいいいいいい。」

中堅進学校、花見坂高校に入学して一週間も経たない今日時分、宵蝉館で空手やりながら青春を謳歌すれば良いだけのはずだった高校生活プランに暗雲が立ち込めて、ベニはいつになく鬱だった。もう死のうかな。ベニは意外とメンタルが脆かった。

「えー？ 私はソウ先輩嫌いじゃないけどなあ」  
間の長かった百合子の返事が今戻ってくる。

ああ、その話だったか、と自分から振っというて忘れかけていたベニが気重な顔を挙げる。向かいで大和撫子風のおかつぱ娘は奥ゆかしい微笑を天井へ向けながら、「んー」とベニの兄について思案しているようだ。

「だってね、私が道場通ってた時、ソウ先輩すっごい優しかったよ。私、空手下手つぴだったから他の男の子たちからかわれたんだけど、ソウ先輩だけ優しかったの」

「あ、そう」  
百合子が兄貴と同じ空手道場に通ってたのは小学生の頃の話だ。

あの駄目兄貴、まさかそんな早くから百合子に唾をかけてたのか？  
うつぎ。

まあなんでもいいが、これ以上弓槻ソウの話題を引きずると百合子が奴に対する好感度を高めていきそうな悪い予感がするので、ベニは話を変えることにした。

「百合子って黒帯だったけ？」

「え？ 違いますよ。緑帯。五級だったかな？ そんなに長くやってなかったからね」「ふうん。やつぱ型とかやるもんなのかいな」  
「てか、組手より型ばっかだったねえ。《平安》とか、《拔塞太》

とかね。なつかしい」

何それ。さつぱわかんね。

空手の動作を演舞化した型。

その存在ならばさすがに知っていたし、見たこともあるが、種類と名前がまったく一致しない。ベニが宵蝉館東京支部の師範から伝授されているのは組手に関する技術ばかりで、ベニも組手以外一切やるつもりはなかった。……昨日までは。

スポーツ推薦計画を有利に進めるためには、大学受験までに公式戦で少しでも色好い成績を残す必要がある。

そのためには、高校部活動の《伝統派空手》とか言う形式の大会に出るしかなさそうだ。

「てなわけで、百合子は部活何やるか決めた？」

「てなわけです？」

内心を固めたベニがやにわに尋ねると、一応の空手経験者である親友は泣きボクロをかすかに上昇させた。目を細くして、怪訝の表情である。

「帰宅部コースのつもりだったよ。なんですかあ、ベニい？ 流的に空手部に入ろうって聞こえますよお」

イエス。さすがに百合子は聡明だ。

実戦派から伝統派へ。

同じ空手とは言え軽く未知の領域である高校空手に挑戦する上で、やはりベニ自身も心細さを感じていたのかもしれない。要するに仲間が欲しかったのだ。

「いいじゃん。百合子、せっかく帯持ちなんだし、またやってみない？」

「帯持ちでもへちヨいよ、私。へちヨへちヨです」

「大丈夫だって。花高の運動部自体へちヨいだろっし。アソビ感覚アソビ感覚」

なんて言っていると自分が駄目人間に思えてくる説得の仕方だが、気にしない。いざ空手部に入ると決心したら楽観的になれた。団体戦が

あるとて空手道は個人競技なのだから、ベニ一人が実力を発揮すればベニ一人で大会を勝ち抜きベニ一人で結果が出せるだろうし、これでも殺人空手の中学チャンピオンだ、多少勝手が違うとてカビくさい伝統空手などすぐにマスターしてくれるわワツハツハ。

他方、百合子は細い顎に指をぴっとり当てて、じっくり考えてるようで、あっさりと言った。

「んー、まあダイエットになるかなあ？ うん、じゃあ見学してみようから」

ベニは両手をバチンと打ち叩く。

「よっしゃ。盛り上がってきました」

次の日。ベニは百合子を連れだって、入学のしおりを頼りに空手道部が練習しているという第二体育館に赴いた。

体操部と共有している体育館の半分、一道場サイズはあるスペースにはそう多くもない胴着姿の男子たちが稽古していた。

しかし、胴着姿の女子は一人として見つからない。

ベニはしおりにもう一度よく目を通して見たが、どこにも「女子空手道部」の文字は存在しなかった。

レ、ミゼラブル。

「格付け報告板」

(良識を弁えてお願いします)

今日、空手部に弓槻紅さんと船山百合子さんがセットで見学に来たので驚きました。弓槻さんは写真で見るとより目付き悪いです。こわい目で稽古を睨んできてビビりました。船山さんはほんわか大人しそうでも良かったです。二人ともすぐに帰ってしまいました。

山形生まれ、陸田コウの高校生活はなかなか良好だった。

上京してきて友人が一人もない状況からのスタートであったが、生まれつきの物怖じしない（組手は例外）性格だったので友達と呼べる存在もすぐに作れた。イッチー、みさぼん、もんちゃん、サクラ様にタモさん。みんなメンコイ。

中でもタモさんこと森田瞳は初対面の時に思わずコウが「うひゃー！」と叫んでしまうほどに美少女で、「うう、あたしごときが読者モデルなるんだぜ」とかナマ言っただけでマジすんませんでした」と誰もいない所で謝罪した。

コウとしても美人を見て緊張するなど初めての経験なので一日目はタモさんの席の半径3メートルあたりで「へいへい」と盗墨手の真似しての微妙なアプローチ方法になってしまった。しかしそうするとタモさんも笑顔で「へいへい」と返してくれるので、ルックスだけじゃなく性格とノリまで良いタモさんは物凄いとコウは感心した。

やがてコウがフレッシュプリキュアの物真似にシフトしてみたところ彼女もプリキュアが好きだったようでそこから一気に打ち解けた。

「ねねね、コウさんは部活入るか決めた？」

そんなわけで今日の昼食もタモさんと、あとタモさんとは中学校から仲が良いという水橋サクラ様（雰囲気が《サクラ様》なのだ、なんとなく）と一緒に。

タモさんの質問に、婆ちゃんお手製弁当を凝視していたコウは「部活つすか？」と顔を挙げる。

「まだつす。自分、不器用つすから」

などと元ネタが誰か知らないのにいい加減な物真似（なぜか力士風味）をすると再び弁当箱に視線を戻す。コウの母は滅多に弁当を作らない人だった上、先週から一緒に暮らすことになった祖母の丹精込めた日本食は素敵極まった。弁当もまた然り。ちよつと芸術入つてる。あああああん食べるの勿体無い！でも食べないのも勿体無い！とジレンマと戦うのが日課になりつつあった。

ちなみに。

「うーん、おいしそう。もらうね。いただきマツハ桜井隼人」

「あ、マイルスイートキンピラオブ、ゴボウがッ」

タモさんにオカズをかつさらわれるのもパターン化の傾向を見せている。

食べ物の怨みと言いたいところだが、卵肌の小顔にぱっちりお目を乗せたタモさんがキンピラゴボウを美味しそうに頬張っているのを一度でも見てしまうともう無理。完・全・無・罪。

そんな感じでコウはにこにこして箸を持ち、遅まきながら昼食をスタートさせていたが、同席中のサクラ様がタモさんの横奪行為を見咎めたようだった。

「行儀悪いよ、森田」

静かに注意を口にしたサクラ様の眼差しは、変な所に向けられていた。斜め下だ。いつもそのあたりの床を眺めながら静々と喋る彼女の雰囲気はミステリアスだとコウは判断している。透明感と言うか、とても高貴な幽霊のように思えてしまう不思議系の女の子だった。

彼女に粗相を指摘されたタモさんは頭を掻きながら笑って「ソリー」と謝ってきた。「コウちゃんは昨日からお弁当見てジツとするからさ。ついこう、悪戯心がウズウズしちゃうというか。ほら、コウちゃん、玉子焼きと交換しよ。食べる？」

「食べるー」

キンピラゴボウがタモさんお手製という玉子焼きに化けました。

コウはこのままわらしべ長者になれそうな気がした。彼女が箸で差し出してきた玉子焼きにそのままパクつと食いついたコウもよほど行儀が悪いだろう。サクラ様は相変わらず床の方を見ているだけだった。

ダシ巻き味の玉子をモグモグしながらコウは先ほどの話題を再考するように言葉を漏らす。

「玉子焼き、うまあい。部活かあ。どうすっぺなあ。二人とも何すんのー？」

部活について決めあぐねていたコウが聞き返すと、美少女系・森田瞳はまるで映画（感動巨編）のワンシーンのような笑顔を出し惜しみなく浮かべた。

「ん？ あたしはもう演劇部に入部届け出したよ」

「はえー。未来の大女優なんだね」

冷やかすつもりではなかったが、コウの言葉にタモさんは瞳を大きくしながら両手をパタパタ振って否定してきた。

「ないない。どっちかって言うとなシナリオ書きたい方だから」

それから彼女は恥ずかしくなったのか、隣の席の相方に矛先を振っている。

「咲良は？ 高校でも帰宅組？」

「フリーランス」

とサクラ様は本気なのか推し量れない表情具合で溜め息を漏らし、床をじーっと見ている。

コウはぐいんと椅子の上で上体をそらす。うーうー言いながら天井に顔を向けた。

「そっかそっかー。あたしどうしよー。結婚してえ」

コウの呟きは大半が意味を持たないが、タモさんは律儀に「したいねえ」と笑って、育児相談所のお姉さんのような微笑でちよろつと前傾してきた。

「中学の時は？ 何か部活やってたの？」

「帰宅部だよー」

道場で空手ならやってたけど とコウは口に出したつもりであったが実際はお弁当の煮付けのにんじんを口に運ぶ作業だけで終わった。

にんじんを飲み込んだあとにはタモさんが「帰宅部かあ。そういやさ、ぜんぜん関係ないんだけど」と昨日やってたお笑い番組の感想を言い出したので、あとは部活の話題が出ることもなく昼休みは終わった。

ふうん、へえ。

あの脱色髪のギャルがあたしと同じ紅の字 陸田コウか。うっわー、あたしより頭わるそー、かるそー。紅、にあわねー。

放課後。

失礼な感想を頭の中でだらだらと流しながら組在籍の弓槻ベニは、A組の入口に立ち、中学からの友人と軽い談笑していた。ちよつとした用事で立ち寄っただけなのだが、そう言えばと、兄貴が参加しているクソ格付けサイトで見つけた紅という名前の女がA組にいたことを思い出して、それとなく友人に「どいつ？」と尋ねたのである。友人が「あそこ、背が高い茶髪の子だ」と視線で教えてくれたので陸田コウが誰なのかわかった。

茶色と言うより灰色じゃないのか、アレ。

かなり明るい色の頭髪だ。スチームパーマで決まる程度のふわふわ加減。

いかにも校則の緩い私立高校で大量発生しやすそうな典型的なギヤルぽかったし、ベニが目を向けた時にはちょうど、中学時代から美少女で有名だった森田瞳とつるんで「ぎゃははははは！」てな感じに馬鹿笑いを放ちつつ手を叩いているし。

バツカみたい。

これがベニの感想の総括である。陸田コウは、いかにも周囲に流されるまま適当に生きているタイプのチャラチャラ系に見えた。そういう奴が、ベニは結構好かなかった。同じ「紅」という名前に対して抱いていた興味も一目で冷めついでしまう。

「良いアルバムあった？」

高校入学前にナンバーガールのCDを半ば無理矢理まとめ貸してあげた友人にベニは感想を求めた。昨日メールして、今日返してもらったのである。友人は苦笑して「あんまり聴かなかったな」と。

崇拜しているバンドの布教に失敗したベニは「えー」と唇を尖らせる。道場の時間まで暇だったので、往生際悪く尋ねてみることにした。ベニは、ベニのベストソングを言う。

「イギーポップ・ファンクラブは？ ちゃんと聴いた？」

「あははははは。すまん、ベニ、流し聴きだったから曲名で言われてもわからんよ」

なので、どこまでも往生際の悪いベニはイギーポップファンクラブの前奏を口ずさみ始めた。「ドゥードゥン、ツタタン、ドゥードゥン、ツタタン」。あの曲のイントロからのリフがベニはたまらなく気に入っていた。

しかし、友人にとってはあまり記憶に残らないメロディだったのか、はたまたベニのハミングが下手くそなせいか、相手は「うーん……」と険しい表情をするばかり。恥ずかしくなったベニは顔を赤くして鼻歌と共にナンバガの話題を切り上げることにした。その

つもりだった。

しかし、微妙な奇跡が発生。

「君いわー、家猫・ム・ス・メ・だったあーん」

ベニは勢いよく背後に振り返った。

誰だ、イギーポップファンクラブを鼻声で歌っているのは、誰だ。何者だ。テンションあがっちゃうだろ。

ギャルが立っていた。

蝶々のピアスを揺らしたギャルが、バナナ柄の子どもっぽいいリュックを背負って立っていた。

「ナンバガー、うちのママも好きだよー。ばいばーい、イッチー。

イッチーの友達も、ばいばーい」

のんびりニコニコ喋ると長身のギャルは、とととつ、とベニの横を通りすぎていった。

ベニの友人、市川は明るい声で手を振っている。

「おー。ばいばいなー、ムツダ」

ムツゴロウさんと大型犬ごっこ。

とか言って放課後にタモさんと少しだけじゃれ合い、やがてタモさんが演劇部に行くと言い出した頃に陸田コウは一人で教室を後にした。

イッチーも今日から陸上部だと言っし、サクラ様にいたっては放課後になった瞬間に忽然と姿を消してしまっし、他にも声をかけてみたけどみんな、部活だ部活だ、と一緒に帰ってくれない。

むっきー。

せっかく東京女子校生になったのに、一人でとぼとぼ帰宅するのに多大なる損失感を持ったコウはプリプリしながら携帯電話を取り

出すと脳内のスロットをグルグル回転させた。チーン。めでたく当選した劉紅に電話をかけた。トゥルルルル。

「あ、もしもし、もっしー？ ホンちゃんーん？ 今から渋谷いかなー？」

「ばかやるー、今から部活だ、と乱暴に言われて通話は切られた。なんだ、ホンちゃんも部活なのか。部活無かったら山形から渋谷まで来てくれたのかな？」

「コウがこちらに越してきてから、リュウ・ホンとは毎日のようにメールのやり取りをしている。相思相愛だ。」

「ホンちゃんは、当たり前だが進学先の高校で空手道部に入ったらしい。」

「ホンちゃんがいたらあたしも空手部入るんだけどなあ」と口をすぼめて携帯電話を閉じた。

しかたがないのでコウは一人で電車に乗り継ぎ、渋谷駅にやって来た。

別に表参道でも新宿でも代官山でも良かったのだが、母が「日曜日に恵比寿行くべさ」とか言ってたので恵比寿じゃない渋谷に来てみた。

「うひょー、人すっげー。」

象徴的な八千公像を見つけて「おう、八千い？ シャルウィダンス？」とファンに見られたら暴動に繋がりそうなりチャード・ギアの物真似をしつつ、八千に向けて写メのシャッターを切った。

それから、一人で渋谷に来て、特にやりたいことを持たない自分に気が付いてコウは萎えた。

「道わかんねーし。」

「お金ねーし。」

「誰も知らねーし。」

「やりたいことが無かったコウは、やがて八千公の傍で「くるりんぱ、くるりんぱ」と回り始めた。」

「ふと思いついたサインだった。」

誰か遊ぼうよ。

くるりんぱ、くるりんぱ。石像の近くで回り続けた。こうしていれば、この回転運動に感動なり同情なり共鳴なりした誰かが話しかけてくれるかもしれないと渋谷で一人回り続けた。

くるりんぱ。

くるりんぱ。

陽も暮れかけてから、たまたま見つけたタワーレコードに立ち寄り電気グルーヴのアルバムを衝動買いすると、とぼとぼコウは帰宅した。

「おい、ソウの妹さん」

はあ？

ソウの妹さん？

すこぶる堪に障る呼び方が聞こえ、ベニはガングレ気味の表情で振り返った。

そろそろ宵蝉館の道場に行かなきゃいけない頃合いだったので帰り支度をし、下駄箱近くの廊下に入ったところで男子生徒に呼び止められたのだ。

坊主頭の、なんか岩みたい な男子だった。

色黒で頬骨とかゴツゴツした感じ。はつきり言って野暮い。ただ、愛想良さげな笑顔は快活な印象を解き放っていた。

兄貴のことを呼び捨てしてたから三年生だろう。また、彼が空手部らしいとの予測は次なる台詞を聞いて立てた。

「全然ソウに似てないな。昨日、空手部に見学来てただろ？」

なにこの人。馴れ馴れしい。ウザっ。と思いつつもベニは一応うなずきを返した。「何か用ですか？」

「ソウも前に空手やってたって言うし。君も経験者？」

「てゆーかあたし中学生チャンピオンなんですけど？（アングラ）自慢したいところだが、相手がどんな用件かもわからないのでベニは「まあ」と無難に答えた。

この後、彼が口にした用件はとてもシンプルだった。

「男子ばかりでビックリしたかもしれないが、良かったら空手部に入ってみないか？」 ベニは刃物型の目を丸くして、首をわずかに前傾させる。

「え。でも、この高校、女子空手部ないんじゃない……」

昨日はそれで酷く落胆したものだ。さよなら指定校推薦こんにちわ未来の参考書漬け（廃人確定コース）という具合に得意の鬱モードに入ったところを百合子に延々マツクで慰められることになった。優しい百合子の一案で「同好会、立ててみます？」という話すら持ち上がったている。

そうだよ。部活表一覧には確かに女子空手道部は存在しなかったんだから、彼の言ってることが詐欺交渉のように聞こえた。フカしてんじゃねえつつうの。

にわかに警戒指数を高めるベニが睨む先、老け顔の三年生は朗らかに笑うと仰々しく頷いた。

「うん。女子空手道部は無いよ。ただ、男子空手道部も無いけどね」

「えー」

お兄ちゃん、あなたの級友、なに言ってるかわかりづらいです……

「空手道部だけってこと。他の学校はどうか知らないが、うちは武道系が全部男女共同なのさ。たぶんどこもそうじゃないか」

「はあ」

言われてみれば中学校の柔道部や剣道部とかそうだったかもしれない。ない。

つまり、何か。あたしの早とちりだったということか？

「あの中でも、昨日、女子部員がいなかった理由は？」

いまだに己の展望が掴めずにいる低速思考のベニは、恐る恐る尋

ねた。ふいー、と岩顔の先輩が変な息を漏らす。

「いまはゼロだな。女子部員。ガチで」

「ガチでゼロっすか」

「なんかなあ、五年前くらいに男子と女子部員が戦争になって、それで女子みんな辞めてしまったらしいんだ」

それは男子の方が悪い、とベニは根拠もなく決めつけながら先輩の話に耳を傾けた。「それ以来ゼロなんだ。やっぱ新しく入学してくる女の子たちも、野郎ばかりでは気後れするらしくてな」

「ふーん」

もともと道場では紅一点のポジションにあるベニには共感のできない話だが、まあ想像はできるかな。たとえば百合子みたいなお嬢様が、男子たちに一人混じって練習してる姿など、ちよっと心配になっってくる。

「そういうわけでソウの妹さん、女子部員活性化のためにも入ってくれないか？」

「その呼び方、やめてくれませんか？ 虫酸が……」

「ベニちゃんか？」

「苗字でッ」

青筋立てながら舌打ち挟みながら声を荒げたベニに、名無しの顔面岩男は悪びれる風もなく笑い、手をひらひらと振った。

「すまんすまん。それじゃ弓楯、改めて入部を考えてもらえないかな」

「女子部員が活性化して、男子に何か得があるんですか？」

ベニはわざと意地の悪い質問をした。

大方、空手の素晴らしさを婦女子にも広めるとか大義名分が飛び出しそうな気がするけど、下心丸見えだっつうの。エロが。

まあ、極端な話、仮に自分や百合子が性欲の対象にされかけても易々と報復できる戦闘力には自信があるのでノープロなんだけど。

男子に混じって公式戦への道が拓けるのなら、それだけでベニには充分な入部動機であった。

あえて決るような類いだつた問いに、ただ、しかし岩男さんはひょうきんな顔を浮かべた後すっぱりと答えている。

「ん？ だって、女の子と一緒に練習できた方が楽しいだろ。男としては」

はー、そうなんすか、とベニは笑う。下心を隠さない所が逆に好印象だつた。

とりあえず「今日は遅れる」と師範に電話を入れることにした。

それから、百合子、今どこにいるかな？

『良かったあ。今、もうまさに、生徒会室で同好会申請のこと聞こうと思つてたの。ギリ、セーフでした。女子空手部作りたいつて聞いてたら恥ずかしかつたかも』

先ほどのあらましを伝えると、電話先で百合子はふんわり柔軟剤が効いてるような笑い声と共に納得していた。ベニは携帯片手に頭を下げる。

一緒に空手部に入ろうと誘つた張本人が何も考えず道場に行こうとしてた頃、百合子は前向きに動いてくれてたらしい。なんていい奴つ。

「ほんツツと、マジごめん！」

『いいっていいって』

「ありがと。百合子、あんたに何があつても、あたし守るから。マフィアだろうとゾンビだろうとマグニチュード10が来ようが絶対に守る。あと百合子が気に入らない奴みんな殺す。ご要望があれば苦しめてから殺す」

『そう？ じゃあ守つてね。今そっちに行きます』

通話を終えた携帯をチャック全開のポロバックにしまい、ベニは

壁に背中を押し付けた。夕焼けが地面を這っている暗い廊下で、百合子を待つてる間、暇潰しに鼻ずさむイギーポップファンクラブ。予想していた方角とは逆側からやってきた百合子は、振り返ると案外そばにいて、「何の歌？」と言った。ベニは何故か陸田コウの事を思い出した。

山形から送ったコウと母の荷物は、段ボールに梱包されたまま三日間も手付かずにあつたが、今日の夕食後に「いい加減、片付けようね」と祖母に言われたのでコウは母と共同で荷ほどきをした。しかしすぐに2003年にあつたPRIDE26のビデオを見つけてしまい作業は中断になり、すぐに二人は、相当ボロいテレビデオが置かれた座敷で缶ビール飲みながら藤田対ヒョードルの試合を見直していた。何度見ても残念な内容なので、つい何度も見ってしまう。「あー、藤田あ、倒せたよ、そこ。ヒョードル意識飛んでるよ。馬鹿、そこでクリンチさせるなつてば。ランデルマンみたくスープレックスしなつて！ うあー。あーあ」

と母は、無邪気な表情で叱責の声をブラウン管の、数年前に結果が出てる両雄に送っていた。母は格闘技を見る時は日本人を「あー、ほんと弱い、シヨボい、つまらない」と辛口方針で見下しながら、しかし熱心に応援する人だった。

対してコウはヒョードルのファン（笑うとかわいいから）で、この直後、不死身のロシアンサンボマスターが日本人プロレスラーにチヨークスリーパーを決めて勝利する展開を何度となく見てきたので、母のように罵声は飛ばすことなく、火の点いた煙草をくわえながら細い目で録画映像を眺めていた。どっちかと言うとヒョードルに一分で処刑された小川の試合の方が笑えるから好きだ。ハッスル

ハッスル。

「ママ」とコウは灰皿にラッキーストライクを押し付けて、よっこいしょっと立ち上がる。「あたし、ちよっと出てく」

「うん、出て出てけ」

と、母は右手で二本目の缶ビールのプルタブを立てて、左手の携帯をぱかっと開いている。

コウも携帯で時計を見た。夜九時を回っていた。

「コンビニ行くの、コウ？ モナ王買ってきてよ」

「任しときんしゃい。でも、二時間くらい戻らないな」

「えー、あんた彼氏できたの？ 連れてきなよ。採点するから」

やだ、辛口だもん、と答えてコウは肩の筋肉を天井に伸ばしながら座敷を出た。

昔、母の妹にあたる叔母が使っていたという子ども部屋に行く。

今はコウの部屋だった。

ストレッチパンツとティーシャツに着替えてから洗面所で手早く化粧を落とした後、洗濯かごを持った祖母と会った。

「コウちゃん、どこ行くの？」

「ちよっと走ってくる」

「えらい」

えへへ、と祖母に笑い返し、コウは外に出た。

この春先、晴れた文京区之夜。

風は吹いておらず暑くも寒くもない外へ出たコウは家の前、ゴムで髪を結いながらアキレス腱を適当に伸ばすと、それから屈伸もし、最後に首から下げたソーウォークマンをシャッフル設定にして、駅の方角へと駆け出した。

しょっぱなからweek！ だったのでちよっとテンションが上昇した。ランニング中には打ってつけの曲だった。

コウは夜が来ると時折、猛烈に走りたい衝動にかられることがある。

走るのはどちらかと言うと好きではないのに、なんでかわからな

いが無性に走りたくなる瞬間があつて、そういう時のコウは欲求を我慢するのも苦手なので走ることにしている。以前、友達に聞くと似たような習性を持つ子はわりと多かつた。みんな男子だつたけど。中学校の頃、大親友だつたヨつちゃん和大喧嘩してお互いに無視し合つた時とか、タケちゃんコーチが大学空手部の合宿で二週間くらい道場に顔を出さなかつた時とか、思えば、コウは心に何か不満が生まれると夜の街に飛び出したい気持ちに襲われることが多かつたように思える。

でも、今夜は自分に不満があるのかよくわからなかつた。

ただ走りたくなつたのは確実だ。単純に、新しく暮らす街の景色に好奇心がそそられただけなのかもしれない。

のちのち苦しくなりそうなペースで腕を振つて、コウはセブンイレブンの角を思いついたままに曲がつた。

大都市東京と言つても、祖父母の家がある住宅街の景観は山形とそう格差があるようにも見えない。なんというか、普通の日本だつた。芸能人はおろか、千鳥足のサラリーマンも裸コートのヘンタイさんも出歩いていない普通の夜道だつた。

定期的に建つている街灯に導かれるまま閑静な道路を三十分ほど走り、そのうちコウは立派な遊歩道を伴つた公園に出くわした。

住宅地とは違い防犯灯や街路灯の数が激減してるので、マックスで暗い。ウォークマンに流れる曲が『気になる女の子』に変わつていたため「あーはん、はん」と言いながら公園に進入した。

そこで足を止めると、腰に巻いているポーチからソフトケースとライターを取り出して一服した。別に体力作りのつもりもなかつた。そして、少し歩きながら公園を散策するうちに柵で区切られた池を見つけたコウは、近所迷惑も考えずに一声叫んだのだ。

「あー、やっぱモヤモヤすんなあー！」

モヤモヤしていた。

そのモヤモヤは正体不明であつた。

コウは自分が、自分自身のことを考えるのがとても下手くそな女

の子だと思う（自分で女の子とか言っちゃう）

たとえば不機嫌になっていてる時とか、いったい何の理由で不機嫌になっているのか自分でも理解できずヨっちゃんとかに「なんかイライラしてない？」と指摘されて、初めてコウは「そうかも」と気付かされるケースが何度かあった。

東京にヨっちゃんはいないし、少し自分で冷静に考えてみることにした。

山形の友達と離れたからかな？

放課後にタモさんたちが部活で構ってくれないからかな？

空手の道場辞めちゃったからかな？

なんだかどれも外れてはいないけど、正解という気もしなかった

……

高校生活はやっぱり楽しそうな予感に満ち溢れているし、放課後に寂しいのならコウも部活に入れればいいだけの話だ。道場のみんなが恋しいのなら夏休みを使って会いに行こう。ホンちゃんとも毎日メールをしている。

じゃあ、このモヤモヤはなんだっぺ。

どうしたら解消されるんスか。

さっそく考えるのが面倒くさくなったコウは短くなったラッキー  
ストライクをポケット灰皿に入れて、もういっちょ。「モヤモヤ  
モッヤー！」

と叫び、さらに、

「ああああああ！」モヤモヤから逃げ切るんじゃああああああ、  
と大声上げながら、灯も落ちた公園を全速力で疾走する。

あっさり燃料切れになり帰りはゼエゼエと歩いて家に向かった。  
母に頼まれたモナ王は買うのを忘れてしまった。

この日の夕方ころ、仲良しの百合子と一緒に高校空手部に入ることにしたベニは早速、子どもの頃から通っている宵蝉館東京支部の師範、間山にその旨を伝えた。

「なるほど、伝統空手をやるのか」

チリチリした短髪で、引き締まった体躯は色黒、そんでもってダメージ加工デニムみたいに良い感じに傷んだ胴着に身を包んだ三代の間山師範は逆に胡散臭く感じるくらい空手家っぽいシブメンだ。夢は虎殺しらしい。でも猫科が好きだから諦めてるらしい。おまけに絶滅危惧種だし、トラ。

「反対しないでよ、師範。あたし推薦で行くから。大学」

異流派の空手に取り組む上で、まずベニは稽古前に師範に報告してみる。

すると、間山師範は胴着に手を入れて胸元の肌をポリポリ掻き（似合いすぎ）、ベニに言った。

「いや、好きにすればいいが」

「えー、冷たい」

眉をしかめて唇を尖らせて、普段よりずっと甘い声を出したベニに、間山師範は横目をジロリと送ってきた。

「反対すれば良いのか？ どっちだ」

「好きにしろって言い方が冷たい。十年間もこのマイナー流派にいてあげたのに。紅一点なのに」

「なんだ、弓楯はうちを辞めたかったのか」

揚げ足を取られたような問い返しに、ベニは「い」と呻いた。他人に感情を読み取らせない間山師範の眼差しに見据えられ、なんであたしってば憎まれ口デフォルトで叩いちゃう性格なんだろうとベニは後悔する。この道場を辞める気はまったくなかった。

「いや、そうじゃないけど……」

「はつきり言え。高校で空手部に入るんだろ」

「うん。……押忍」

「道場は、辞めたいのか、続けるのか？」

だんだん叱られている気分になってきたベニは赤くなった顔で俯き、小声で答えた。ただ、開いた口が小さすぎて発音が変。「おしゅ、続けましゅ……」

「聞こえない。別に叱ってるわけじゃない。弓楯がやりたいようにしろ」

「だから、続けるってば！」

そうか、と答えただけで間山師範は、両の内腿にそれぞれ足の裏を打ち付けて胴着を鳴らすと、雑居ビル内の道場スペースに集った門下生たちに稽古開始を言い渡していた。門下生たちはみんな筋肉隆々として勇ましく、中にはタトゥーを掘っていたりして、経済大国日本の景観をカンペキ崩しそうな荒くれ者風が多かった。

ベニがただ一人女の子で未成年。

稽古前に愚痴愚痴し始めた。

師範、冷たい。

沖縄で全国大会優勝した時も誉めてくれなかったし、その大会で顔パン（反則）もらって鼻血出たのに心配そうにしてくれなかったし七歳の時からいるのに頭を撫でてくれたことなんて一度たりともないし、そもそも年に数回くらいしか笑うことがない。そのくせ、稽古中にキレるとマジホラー。

ベニが女の子でも、優しく接してくれる瞬間など無いに等しい。

「しはん、あたし、誕生日なの」「１１歳か」「うん」「そうか」

「そっだよ」「……」「……終わりかよ！　って感じた。いつも。」

師範、あたし女子校生になつたんすよ。

もうちよつとさあ、デレデレしても良くない？　鼻の下伸びてこねーもんなのソコ？　この体重で何気にブラＣ後半あるつつうの。シルエツト良い感じに膨らんでるつつうの。あれか。Dか。Dの壁か。グラビアみたいな嘘乳じゃないと胸と認めないタイプなのか。

まあ、一向に冷たい間山師範の気を惹こうと七年間も頑張っている自分は案外DMなのかも、って時々思う。

こんな痛い稽古さんざん続けてきたわけだし……と言いつつ、

「うがぁ、ベニちゃん、力抜いてくれ……」

「あ、ごめん」

もっぱら相手が痛がるのだった。

基礎練の一つ、二人一組の打ち込み稽古でベニと組んでいたコワメンのオッサン（36歳、高級クラブの警備員。スキンヘッド）がベニに殴られた胸を押さえてうづくまる。

ベニは道場仲間からよく『漫画パンチ』と呼ばれていた。

まるで漫画のように尋常ではないパンチ力とキック力を持っているせいだ。いったいどこで進化を間違えたのか自分でも不明。家系図を辿れば是害坊くらいは眠っているかもしれない。

おかげで宵蝉館が開く組手大会の子どもの部（顔面への打撃を禁止したフルコンルール）では敵なし。腹パン一発で相手が簡単に沈むので、ベニ以外は全員が男の子だった大会でも余裕で優勝することができた。以来、間山師範からは「出ても意味がない」と道場大会に出場させてもらえなくなってしまった。強すぎるって罪。

黙祷う！

神前に礼！

正面に礼！

「お疲れしゃあーっしたあ！」

と、今夜も道場での稽古は終了したので、ベニはミットや防具を収納している用具室で着替えることにした。その前に「ベニちゃん、車で送ってこか？」と新車を買ったらしい関西人に誘われたので、「やだ」とキツパリことわっておく。

異性交際歴まったくもってゼロのベニは基本的に男に対して潔癖

だった。ホイホイ車に乗るとやられるとさえ疑っている。まあ、実際に襲われても怖くないけど。でも車で男と二人きりつてのは、ちよつと……

ただ、

「弓槻、ちよつと残れ」

と今夜、間山師範に言われた時には素直だった。彼に居残りを言い渡されるなんてこれまでの記憶に無い出来事だが、もしかすると帰りに車で送ってくれるかもしれない。だったら超乗るんですけど。「着替えなくていい。空手の話だ。裸足で聞け」

そのような指示までされたので何故かベニは、一昔前に偶然、空手着姿の女性がパツケージでセクシーポーズしている兄貴のコレクシヨンスDVDを発見してしまい鳥肌を立てた日のことを思い出した。タイトルが『密着！ タチ稽古3時間！』……あの時は空手辞めようか一瞬迷った。ああもうあのエロ眼鏡、何回殺してやるぞ。

道場の真ん中。

向き合い、今にも立稽古が始まりそうなベニと間山師範の位置取り。

宵蝉館のコワメンズがおいおい帰り出した頃、間山師範はいつものように淡々と口を開いた。

「お前に、伝えておくことがある」

なんかもう駄目。このナンチュラルに格ゲーに登場しそうな雰囲気にあたし弱い。と、軽くドキドキしながら、ベニは師範の用件が何なのかを待ち望んで、彼の唇を特に凝視してみたが、

「お前は、俺からするとつまらない弟子だ。非常にな」

「……あの、泣いていいかな？」

ベニは崩れかかった。なにそれ、超いらねーカミングアウト。七年越しでそんなこと、壮絶に聞きたくなかったんですけど。

「弓槻、宵蝉館の秘訓を言ってみる」

「人体破壊」

正直どうかなって思う。

「ああ、人体の破壊だ。神経、筋肉、間接における痛覚、拒否反応破壊をもつてして科学的に人体を制する。即死性、即効性の高い急所への攻撃。うちの空手とはそういうもので、稽古は全て実戦的な相手の打倒、つまり《殺し》を想定している。宵蝉館はルールや礼節、精神的なものをあまり重視はしない」

だから公言されることはない秘訓。

聞いた話、宵蝉館の入門・破門における厳しさは他の民間道場の比にならないとか。実はめちゃくちゃ物騒な流派だったりする。

「だが、弓楯、お前の打撃は生まれつき質が高い。同年代なら、相手が防御しようがお構い無しだ」

格ゲーに出そうなのは自分の方だったか。

だって体質(？)なんだからしょうがないじゃん。

「……師範、もしかして、あたし、破門の展開？」

話の意図が見えずベニは不安になったが、「違う」と彼は首を横に振った。

「高校部活道の空手がどういうものか知っているか？」

「んー、まあ……実践じゃなくて伝統重視系のお堅い流派的な、危なくない感じの」

言ってる自分でも認識が曖昧すぎることに気付いた。「〴〵系の〴〵的な感じの」って完全にニュアンスオンリー。

でも大外れではなかったようで、間山師範は生真面目な表情を首肯させている。

「伝統派空手の組手では厳密なルールの中で試合する。武道の精神を通してのスポーツと言っても良い。実践流派とはかなり趣きが異なる」

そして間山師範はベニの兄とまったく同じことを言い始めた。

「たぶんな、お前が大学に行きたいなら、空手部で結果出すよりも真面目に勉強した方が堅実だぞ。絶対に」

ムカついた。

決めつけないでよ。

師範はあたしがどれだけ勉強できない子が知らないからそんなこと  
と言えるんだって！（単に勉強嫌いなだけ）

「あ、師範。もしかして、あたしが宵蝉館から浮気するのに嫉妬？  
実はさあ、そうなんですよー」

「ただし、根拠がなくても自信に溢れてる所がお前の長所だと思う  
うわーん無視られたあー！

危うくフラストレーションがはち切れそうになったけど。

「努力が成果に繋がるのはどの分野も変わらないからな。応援はす  
るつもりだ。部活に関しても、遠慮なく相談してくれよ」

間山師範が、流れ星並みにレア値が高い優しい言葉と、さらには  
笑顔まで浮かべていたのでベニはコロリと落ちた。うん、するする、  
相談、しまくり。むしろ空手と関係無い相談までしちゃう勢い。

残念ながら彼の話はそこで終了らしい。

「つまらんことで時間を取らせて悪かった。帰っていいぞ」

と言われたので、「この雰囲気は攻めれる」と思ったベニはさっ  
そく腕を後ろに絡ませてモジモジ始めた。

「あのね、師範、そのね。最近、帰りの電車で痴漢に遭うんだ。恐  
いから、く、車で送って欲しい……かも」

これは……やった本人すら恐ろしくなるほどに絶妙な演技でした  
ね、ねえ、解説のベニさん？ はい、実況のベニさん、今のは、

普段凜としている武道少女がふとした瞬間に見せる弱々しさを巧み  
に織り込んできた完璧なツンデレです。これに庇護欲を沸き立てな  
い男はガチでゲイですね、ガチゲイ。

つまり間山関空という空手家はゲイかもしれない……

車で送って、と頼んだ後の彼は、はつきりと迷惑そうな、険しい  
表情を浮かべていた。

「痴漢？ ……弓楯、なんのために空手やってるんだ。情けない」

グッサア！ と刺さったところに、もう一発。

「それと、もう高校生だろ。軽率に男の車に乗ろうとするな、馬鹿  
もん」



## 02：紅色の泣き虫

翌日。

「いいなあ、ベニい。黒帯なんですね」

「実戦最強、宵蝉館空手道初段の弓槻紅です、ヨロリン」

「よろりん」

「百合子の緑帯もかわいいじゃん、ライトグリーン。てゆうか百合子の胴着姿ってのが貴重」

「やめてやめて。小学校からそんな背伸びてないけど、ちょっとツンツルテンですよ。恥ずかしい」

「丈は短めの方がかっこいいって」

「そうかな」

「そうだって。あたしも詰めよつかな」

「ベニ、ベニ、思い切って肩のところ破いちゃえば？ ビリビリい、つて。それでノースリーブの胴着」

「ちよつとちよつと。格ゲーのキャラじゃんか、それ」

あはは、うふふ、とか生ぬるい談笑しながら女バレと女バスの厚意で相席させてもらった女子更衣室での着替えを終えると、ベニは百合子と一緒に連絡通路を通って第二体育館に向かっていた。

昨日、ベニを勧誘してきたあの、人が良さそうな岩顔の上級生は

空手道部の主将だったらしく、「まあ見学からでも良いから、また来てくれよ」と言っていたので今日からさっそく顔を出すことにしたのだ。

部活に行くまでの途中、部室棟をうろついている生徒たちがじろと見てきた。やっぱりこの高校では空手着姿の女子は物珍しいようだ。

柔道部らしき生徒たちにはたつてはベニたちを見ると「あれ？

うちの部？」「あ、違う。たぶん空手着だ」「え、できたんだ、女子の空手」と声を漏らしていた。

「うひょー！ 女子きた女子、花高空手部に女子がキター！」

「しかも空手着！ かわいいっすわ！」

「でかしたあ岩村！ 主将らしい仕事したな！」

「これでこの夏の俺たちは勝てる！」

「うわ。……っげん」

二人が第二体育館へ足を運ぶと、フロアで空手マットを準備していた男子空手部員たちが待ってましたと言わんばかりに大盛り上がりを見せていたため、ベニは苦虫を噛み潰した表情で呟いた。昔から男子との会話が得意じゃないという百合子もヒいてる感じの苦笑で頬を赤くしている。

「落ち着け、お前ら。嬉しいのはわかるが」

欣喜雀躍としている男子たちの中から前に出てきたのは、昨日ベニが会った主将の人。

名前は岩村。

興味無いが憶えてしまった。だって岩顔で岩村なんだもん。

彼は他の部員の興奮を制した後、主将らしい落ち着き具合で挨拶

を始めた。

「よく来てくれたなあ。初日から胴着なんて、やる気満々じゃないか、二人とも」

男子部員は見たところ七名。上下とも空手着姿なのは黒帯を締めた岩村くらいで、あとの者は下だけが胴着、上は टीーシャツ か ジャージ という 楽 そう な 恰好 だ。

今すぐにも空手をできる出で立ちのベニと百合子はお互いを顔を見合わせて、すぐにベニは不機嫌な顔を浮かべると、圭角ある口調で岩村に言葉を返す。

「だって、入部しろって言ったのは先輩でしょ？」  
嫌味だとは思っ。

胴着について、お前ら超ノリノリじゃーん、と言われたように聞こえて、ベニは少し気恥ずかしかったのだ。ベニの憎まれ口は自分のペースを上手く保つための防壁のようなものである。それは癖とも言う。

しかし、岩村主将は鈍感な人なのか、ベニの刺々しさにもまった表情を変えず、清々しく頷いていた。

「ああ、そうだな。ありがとう。じゃあ、いきなりだが、自己紹介してもらえるか？」

岩村主将の言葉に男子部員たちがヒューツて感じで声を上げていた。ベニは表情がますます険しくなってしまう。

憎まれ口が得意でも、まったく人見知りをしないわけではなかった。

まずはアンタから自己紹介しろよ、と言いたかったがガキっぽいのでやめて、しかたなく岩村の要求を飲むことにした。

「……北中出身の弓槻紅でえす。初段でえす。特技は人体を破壊することです」

大ウケだった。

事実なんですけど。

部員たちは手を叩きながら「ベニちゃん、おもしろーい」「俺も破

壊されてえ」などと持て囃している。下品な奴ら。今すぐ破壊してあげようか。ベニちゃんって呼ばないでほしい。

もとより同年代の異性には興味がなく、また、高校の公式戦に出られれば良いだけのベニは部員たちと馴れ合うつもりもなく、鼻を鳴らしてそっぽを向いた。その後、百合子も自分のことを紹介し始めている。

「1年C組の船山百合子です。弓槻さんと同じ北中に通ってました。空手は、護身術の役に立てば良いかなと思って、興味を持っているんで、見学からですがよろしくお願いします」

やはり優等生、ベニとは違い挨拶がしっかりしている。ただ、さすがに入部の動機がダイエツトなのは男子相手には秘匿で通すようだ。

それから、完全にどうでも良い男子部員たちによる寒いテンション任せの自己紹介を聞き流し、最後に温厚な縄文杉みたいな顔の岩村主将が空手部全体の紹介に入っていた。

「今日はまだ一人来てないが、男子部員は全部で八人だ。顧問はいるがまったくの空手初心者で、部活に顔を出すことはない。だから監督はいないと思ってくれ」

おいおい、我流っすか、とベニは呆れてうすら笑いを浮かべる。ここだけの話、アラサーのシブメン顧問だったら嬉しいなと期待していたのでちょっとガツカリだ。

「目標はまあ、やっぱり全国大会出場だな。個人種目でも団体でも狙えるところは狙っていききたいと思う」

ベニは手を挙げた。

「あ、う、質問して、いいですか？」

「よろしい」

よろしいって何よ、ギャグ？ 眉を潜めつつもベニは気になるとを訊く。

「先輩たちって、大会でどのくらいレベルなんですか？」

ここの男子たちには一切興味ないが、これは一応重要な質問であ

った。

ベニが高校で空手部を始める根底にあるのは、内申点の強化。すなわち大会での実績だ。

理想は全国大会での優勝、最低でも都大会くらいは余裕で優勝しておかないとね（本気）

そういうわけだから、伝統流派でのつとり早い稽古相手、男子部員たちの成績に対してベニは関心を寄せたのである。

ベニの質問に岩村は背筋を伸ばす動作を見せた。

「去年は、都大会の団体組手でベスト8まで行ったぞ」  
うわ、ビミョ。

ベスト8じゃ内申書に記載されてても全然インパクトが無いじゃん。おまけに団体競技だしさ。まあ、地区大会どまりの弱小部じゃないだけマシなのかな……。

と、理想が高すぎていまいち反応が悪いベニに、岩村は続けて発表した。

「それと、ここにいないうちのエースが、都大会の個人組手で準優勝して全国大会でもベスト16だ」

「へー」

よし、そいつボコろう、とベニの中では決定。

「ところで、弓槻と船山、」と岩村主将は話題を次のことに移す。

「二人とも経験者だが、やるなら型と組手、どっちを頑張りたい？」  
「組手です」

ベニは即答したが、隣で大人しく立っていた百合子の方は回答に時間を使っていた。「んー」と、笑っているようにも見える口元で眉をしかめていたが、やがて「未定です」と答えていた。

返答を回収して、岩村主将はハハハと笑いながら首肯する。

「了解した。うちの練習は組手の比重が多いとだけは言っとく。この部で型やるのは俺くらいだ。基礎練以外、型は個人練習で頼む」  
型かあ。

地味だし、あたしパスかな。

ベニの型に対するイメージはその程度だ。

「森田瞳、劇部に行つきまーす！」

放課後になるとタモさんが元気に席を立ち上がったので、帰宅部の陸田コウは特に考えもなく邪魔をした。

後ろからムギユツと抱き締めてみた。

「よお、タモさん。俺つちのために演劇部、やめへんか？」

タモさんはハグされたまま細身をするりと回すと、コウに正面を向けて天真爛漫な笑顔を崩さず謝絶した。「やめへーん」

コウは駄々をこねた。

「うえー。あたしと一緒に有閑倶楽部入ってよー。その活動方針はもっぱらあたしと一緒に下校して激しく愛し合うんだぜ。どうだい」「あぶなっ。いま気持ち軽く揺れた。うー、でも、ごめんね。おう、よしよし」

タモさんが子どもをあやすように誤魔化そうとしてきたので、コウは見事に誤魔化された。ただ単に、タモさんが部活で消えちゃう前に密着してきたかっただけある。それから少しの間、ギユウギユウし合っていると、タモさんが逆にコウのことを誘ってきた。

「てか、コウさん、劇部に入らない？ 大歓迎なんだけど」

「うひゃひゃひゃ、とコウは抱擁中に身をよじり笑った。

「やめとくー。なんかタモさんにベタベタして邪魔しちやいそうだし。正直、興味薄いしなあ」

「あっはっは、それもまたヨシ。万事、楽しけりゃオーケー！ 興味でたら言ってね。今日のところはサラバじゃー」

「サラバー。タモさんファイター」

爽快に教室を去っていった彼女の背中を見送って、「うんうん、

青春しとるなー」とオヤジのような顔で満足したあとお気に入り、バナナ柄のリュックをひょいっと肩に担いだ。

このあとどうしようかな、と考えていたら、教室の隅の机でたむろしていた男子たち三人が顔を向けてきた。

そのうちの一人、爽やかカットの黒髪に青い眼鏡の鴻池が片手を挙げた。

「よ、ムツダ」

コウも「よー」と手を挙げ返した。

机の上にケツを乗せて座っている鴻池は、メタリックブルーの眼鏡の奥からコウのことを見上げるように言った。

「ムツダ、今もう帰り？」

「んだすよー」

「あ、そう。ビリヤード行かない？俺たち今から行くんだけど」

「いいの？」

「四人の方がゲームしやすいから」

「じゃあ行くー」

鴻池くん、梶田くん、大久保くん。名前くらいしか知らなかった。

あ、鴻池くんとは一昨日に交換したからメアドと番号も知ってるか。本当に、その程度だった。

学校から駅二つほど先にあるビリヤード場に行くと、コウは目を輝かせるようにしてまずは天井から仰いだ。大きな換気扇がゆっくりクルクル回ってるのがアメリカ映画の中のバーみたいで感動的だった。

慣れた手つきでカラフルなボールを台にセットしながら鴻池が聞いてきた。

「そついや、ムツダ、ルールどれくらい知ってる？」

「ぜんぜん知らねー」

「じゃあ、簡単なのやるか」

ビリヤードが得意なのは鴻池と、身長が180センチもあるソバカス顔の大久保という二人らしい。ぽつちやりめの楢田は、コウと同様に初心者だったようで「鑄を削るうぜー！」という雰囲気では全然なかった。

鴻池からキユウを手渡されたコウはそれを肩に担いでポーズを取ると彼に言った。

「ほらほら、ジャツキーチェン」

「は？」

「ラツシユアワの。ビリヤードの棒で戦うんだよ」

彼は笑いながら首を振った。

「わり、それ観たことない。その変なりユック、向こう置いてこいよ」

「変なつてゆるいな」

と、さつきから会話になるのはオシャレ眼鏡の鴻池とだけで、あの二人はそれを外野から見て和やかに笑っている感じだった。

コウが二人に「ねえねえ、ジャツキー好き？」と訊いても、「いやあ？」「さあ？」「知らない」「ごめんね」と、かなり大人しい対応をされた。別に謝らなくてもいいのに。二人とも鴻池とは普通に笑い合ってるようだし、あたし、ウザがられてるのかな？

「ムツダ、お前さ、その構え、ふざけて……」

「ないから。マジのつもり」

とりあえずコウはテレビなどで見るイメージをもとに我流で構えてみたが、かなりおかしかったらしい。

鴻池に少しの手ほどきを受けた後、それから2対2に分かれての簡単な球取りゲームをすることになった。

ジュークボックスの曲目をコウが見ているうちに、どういつ決め方だったのか、いつの間やら鴻池と組むことになっていた。「俺た

ちはラインの入ったボールをポケットに落とす」と、彼は教えてくれた。

マジかよ。

「二年の間山慈恩です、どーもどーも」

と、稽古開始ギリギリで姿を見せたインハイ出場選手らしい二年生部員に自己紹介され、ベニは危うくずっこけそうになった。

なんだか目の前で間山師範が可愛く笑ってるんですけど。

「あ、聞いているよね？ 間山観空の弟だよ、俺。兄がいつもお世話になってます」

いえ、こちらこそ。それと七年間、一度も聞いたことないです。こんなにお若い弟さんがいらっしやるなんて。うふふ、いやだわ、あの人ったら、あたしには何も教えてくださらないんですもの。

……という返事が一切口にできないほど驚いているベニは、ただ目を白黒させて立ち尽くすことになった。

なんて言うか、間山師範の中学生時代はきつとこんな感じ。整った形の童顔、渋くない時点でベニの好みのタイプからは大きく外れるが、しかし笑った時の爽やかさは兄譲りという逸材だった。

その慈恩先輩は子犬のようにコロコロ笑いながら、五メートル向こうに立っている主将にわざわざ手を振った。いけない、彼が小学生に見えてくる。

「主将ー、アップの後、弓槻さんと組手やって良いっすかー？」

「ああ、いいぞ」と岩村。

「……は？」とベニ。

間山慈恩という少年高校生は、きょとんとするベニに再び顔を戻し、それから、ぞっとするほどに無邪気な笑顔を浮かべてきた。

「兄さんに頼まれたんだよね。君に高校空手道の厳しさ教えてやれ、  
ってさ」

ビリヤードは簡単なルールなら簡単で、初心者のコウでもかなり  
楽しめた。

ボールがポケットに入るたびに「イエーイ」と、味方である鴻池  
とハイタッチを交わしたり、敵チームの梶田と大久保の番に回ると  
「外せ外せ外せ」と呪いを送ってみたりしながら何ゲームか楽しん  
でいるうちにチーム替えもなのまま終了時間になった。

男子たちはスムーズに会計を済ませてしまい、店を出た後にコウ  
がポール・スミス स्टライプ ウォレットを取り出すと鴻池は手を  
振った。

「いいって、誘ったの俺だし」

「えー、払うよ。しっかり楽しんだ分」

「なら、カラオケ行こうぜ。そっちでのごっつてよ」

もちろん快諾した。ビリヤードよりも十八番だし。

プリキュアメドレーから入ろうかなと頭の中で早速決めていると、  
しかし、梶田と大久保は帰ると言い出した。

「夜に家族と出掛けるんだ。またね」

「ごめん。俺もちょっと」

「えー」とコウは主に描いてる眉毛をへの字にして「付き合い悪い  
とリストラするぞ」

コウの冗談に笑いを返すと、二人はあっさりと帰っていった。

鴻池は吐息を落とした後、尋ねてきた。

「帰るんなら送るけど」

「え？ カラオケは？」

「……じゃあ、こっちの方。安いところあるから」  
地元の人間らしい彼は駅と逆方向に歩き始めた。

カラオケ屋につくと、山形の店よりもずっと礼儀正しい接客をする店員に鴻池は「二名、一時間」と伝えてから、コウへと振り返り、「ドリンクバーいる？」と訊いてきたから「いる」と答えた。

通された部屋は結構狭くて、灰皿が付いていたから無意識にリュックの隠し袋（対、持ち物検査）に手が伸びたが、途中で思い直して止めた。気の利く鴻池がウーロン茶とメロンソーダを持ってきてメロンソーダの方をコウの前に置いた。狭めの席だったが、彼は隙間を置くように腰を下ろした。

どちらとも、すぐに歌を入れることはなかった。

「ムツダって何聴くの？」

「プリキュア」

「オタクだなあ」

「熟れたてフレッシュ、キュアパッション。日曜日の朝に萌え萌え。あと、相葉くん大好きだから嵐は全部買ってる。鴻池くんは何聴くの？」

「レディへ。レディオヘッド」

「オタクだなー」

「笑わずなよ。聴いたことないだろ、絶対」

「バレたか」

「レディへを差してオタクはない」

「ロボットアニメかと思った」

「邦楽なら向井秀徳とか。まあ、ムツダのことだから知らないだらうけど」

「ところがムツダは知っている。ナンバガの人っしょ」

「マジ？」

「うん。ママが好きなの」

「お母さん渋いな。ムツダは？」

「結構好き」

「そっか。まあ解散した奴らだしな。俺らの世代で知ってるのは貴重」

「そう？ この前イチーの友達がイギーポップファンクラブ歌ってたよ」

「あ、それ弓槻ベニ、絶対。あいつも仲間」

「ベニ？」

「紅って書いてベニ。ムツダと一緒に」

「へー！ 紅なんだ。なんか運命感じるな。結婚したい」

「レスか」

「レスだよ」

「まあ、頑張つてオランダに移住してくれ。応援する」

「いやだー、相葉ちゃんと離れたくない」

「どっち。結局」

「ん？ そりゃ、基本的に普通つすよ。レスは冗談。半分」

「そう」

鴻池は鼻をこすつた後にデジタル製品の曲目を使い選曲したようだ。すぐに流れ始めた前奏は、コウもよく知っているオリコン上位の有名曲のものだった。

普通に上手い鴻池の歌が終わると、コウはパチパチと拍手して批評した。

「うまいうまい。声もなんか似てるしね。８８点をあげましょう」

熱唱という感じではなかったが彼の顔は少し赤くなっていた。画面を見つめるように言った。

「ムツダ、曲は？」

「おっと、採点マシーンになりきってて忘れてたぜ」

カラオケ慣れたコウはパパッとデンモクを操作して曲を入れた。やっぱりプリキュアは止めて、歌いやすい倅田來未にしておいた。

曲が始まる前に鴻池から青い眼鏡を徴収して、

「プロモのマネ」

と立ち上がり、存在しない振り付けを捏造しながら歌った。途中で鴻池が「歌詞が見えませんか」と言ったので思わず笑ってしまった。

コウの曲が終わると、また会話になった。

「キミ、眼鏡、返しなさい。おじさん眼が悪いから」

「ほんと、これ、度がつよー。頭痛のせいで頭イタイ」

「もしもギャグじゃなかったらお前ヤバいぞ」

「えー？ あ、こつすればいいんだ」

コウは眼鏡をずり下げた。さつきからボヤけていた視界がようやく定まった。

依然として眼鏡を奪われている鴻池は目を細くして、不満そうにコウを眺めていた

素顔の彼は眼鏡がある時よりも幾分大人びた印象の顔立ちに見えたが、本当に目が悪いらしく子どものように訊いてきた。

「なに？ どうしたって？」

コウは眼鏡の両サイドを掴んで上下させた。

「だから、眼鏡を、こつ」

「見えねーって」

しかたなくコウは鴻池に上半身を乗り出し、間近から覗き込むようにズリ下がった眼鏡を見せつけた。

「まったく、世話の焼ける鴻池くんだな」

と、コウは軽い気持ちで相手を笑うつもりだったのだ。

しかし、鴻池は顔を酷くしかめた。

びっくりするほどに表情を変えたため、コウは身を退いて「あ、すまん」と咄嗟に謝った。何がいけなかったのかな、匂いかな、と考えている間にも鴻池は顔を伏せて頭をガリガリと掻いていた。

それから、

「ムツダ、ほんと悪い」

鴻池は再び顔を挙げてくると、そのまま身体を動かした。

なんで謝るの？ とコウが首をかしげた直後、

「今の、ちょっと可愛かった」

鴻池にキスされた。

なるほどだから謝ったのか。

正拳突き。

前屈しての中段逆突き。騎馬立ちしての正拳突き。

上受け、内受け、外受け。

前蹴り、蹴込み、足刀、上段回し蹴り、中段回し蹴り。

刻み、逆突き、中段逆突き、追い突き。

ワンツ―。

ワンツ―。

あっそれワンツ―。

なんだこんなものか。チヨロい。

と空手部の基本練習に参加してみたベニは早くも思っていた。

立ち姿勢など、多少勝手が違ふところもあるがすぐに覚えられそうだし、実戦派も伝統派も基本動作は似たようなもので、むしろ鍵突きとか肘鉄とか膝蹴り、といった細かい攻撃動作が存在しない分、伝統派の練習の方が味気無く感じるほどだ。ふう、こんな練習じゃ汗もかけないわ、とか言ってみたり。

実際にはベニも少し身体が暖まって、基礎練が終了したところ。

「はい、弓槻さん、これ全部付けて。ガツチリ」

入部初日から先輩とのエキシビジョンマッチ。

ほがらかな声と共に間山慈恩が両手に荷物を抱えてニコニコ近寄

ってきたのでベニは目眩を感じる、悪い意味で。

「これ面包、これ拳サポーター、これが腹当て。付け方わからなかったら訊いてよ」

「あー、どうも……」

間山師範と同じ顔に明るい雰囲気というギャップに慣れるまでしばらく苦しみそうだな、と苛みつつ、慈恩先輩が持ってきた防具一式を受け取る。

平たく言うと頭部を保護するヘッドギアに、拳を保護するグローブと、あとポンポンを守るための腹巻きだった。

まあ、防具なら宵蝉館のスパ―練習でもたまに付けるから着用方法に関しては問題なし。

「あたし別に防具いららないんですけど。邪魔だし」

「ダメ」

慈恩先輩は笑顔固定のまま眉間にシワを寄せた。

「三点防具の着用は義務だからね。面付きの組手に慣れてもらわないと。空手《部》に入るなら」

「……わかりました」

渋々とうなずき、ベニは帯を解くと胸を開けてまずは腹当てから巻き始めた。胴着の上から巻いても良かったのだけど、ダサイからイヤ。

同様に準備をしながら、慈恩先輩が柔らかい声で言っていた。

「それにさ、俺は兄さんみたく上手くないからさ」

犬の耳を生やせば似合いそうな少年顔が、にっこり言った。

「防具ないと危ないよ、弓槻さん。怪我しちゃうかも」

「は？」

今の、……ひよつとして挑発ですか？

あっさり殺気が芽生えちゃうベニが問いただす前に、間山の姓を持つ高校生は向こうに行ってしまった。

怪我？ あたしが？

ふうん、へえ、ほお。楽しくなるようなこと言ってくれるじゃん。

「ベニい？」

彼と入れ替わりに、胴着姿の百合子が寄ってきた。

あまり活動的なイメージの湧かない彼女だが、さすがに経験者だけあって先の基礎練習では空手っぽい動きをしておりベニにギャツブ萌えを感じさせた百合子は、心配そうな顔を浮かべている。

あとは面包を頭に被るだけのベニは、その防具をお腹の前に抱えながら友人の様子を笑った。

「あんた、なんて顔してんの」

「だって、相手の先輩、インターハイ選手なんでしょ？ 男子と女子だし。怪我しないでよ、ほんと」

「こんな防具もっさり付けさせられて、怪我しようもないから」

「うん」

「ありがと、百合子。あたしが全国大会行く時はマネージャーとして同伴してよ」

「もう、ベニってば」

豪快な台詞を臆面なく言うベニに、親友は口に手を添えて笑っていたが、しかし眉毛の形はまだまだ心配そうに下っていた。

そしてベニは面包を装着して空手マットの上に立つ。

審判を務めるのは主将の岩村。今は空手着の上から紺色のジャージを羽織っている。

その他、副審のつもりなのか女好きの男子部員どもが正方形マットの四隅で気ままに腰を下ろし、「ベニちゃん、がんばれよー」と応援してくれたのでベニはニコやかに彼らをガン無視した。百合子にだけ拳サポーターを付けた手を振っておく。

面包でベビーフェイスを隠した間山慈恩もマットに上がってくる。

『んじゃ、ルールから覚えよつか。まずは、宵蝉館の空手でおいでよ』

面包によつてくぐもった声だった。ベニも返す。

『怪我させてもいいなら』

彼は肩を揺らし、笑い声を漏らしていた。

『怖いなー。弓槻さんは実戦向きの性格なんだ』

「始めるぞ」

主審役の岩村が一步前に進んだ。

お互いに礼。

対戦する両者が顔を挙げたのを見計らい、岩村主将は片手をすつと挙げて降り下ろした。

開始の合図を叫ぶ。

「勝負三本……始！」

ベニはひとまず動かない。

せつかく防具を付けているのだから様子見として相手に一発打たせてみてもいいかもしれない。この面包ってヤツのせいで視界が慣れないことになってるし。

開始と同時にステップを刻み始めている間山慈恩の身長は、見たところ170弱。ベニは160強。リーチの差はそれほど恐れることもない。

「……」

相手はまるでアウトボクサーのように小刻みなステップを踏み、ベニとの間合いを測っている様子。

この分ならわりと遠い間合いから仕掛けてきそう……と予想してみるベニのスタイルは対称的にステップを踏まないベタ足だった。

インファイター。

主な勝利パターンはフックで相手の肋骨にヒビを入れること（15歳、渋い彼氏募集中）

距離遠いし、ローキックで足から潰してこうかなとベニが考え始めたころに、ようやく間山慈恩の方から仕掛けてきた。

左足がかすかに動き、

『オオ、サア!!』

気合いの一声。

それと共に一発。

それは身体ごとぶつけてくるような、えらく踏み込みの深いジャブだった。

しかも、速い。

やや面食らったものの反応したベニは頭を振って敵の左拳をかわすと、攻撃が面包にかすり「チツ」と音が立つ。

それから、ベニは手加減する気も無いので、わざわざ接近してくれた間山慈恩の肝臓あたりを強く打ってやろうかと企んだ。

しかし、攻撃後に間山慈恩が正面から身体をぶつけてきたものだから予定は崩れた

『(つぎッ)』

いきなりのクリンチ。

近距離ではなく超近距離。

互いに身体を密着させた状態ではロクな打撃を狙えない。ただ、

小柄なベニの方がまだ動く余地がある分有利なのだが。

いったい何を考えてるのか間山弟？ と怪訝に思っている間もなく、相手はベニの身体を押し出すようにして自らも後方へと飛んだ。

そして一声。

『サア!』

離れ際、ベニの面包を狙っての右ストレート。あぶなっ。いちいち攻撃が速いのでカウンターを狙う余裕もなく、ベニは頭を下げて回避する。

そして、ベニが目線を元の高さに戻した時には既に、間山慈恩は遠く離れていた。

ウザウザウザウザ。男なら近いところで打ち合えつつの。と言ってやりたいところだが、相手のファイトスタイルに難癖を付けるのは空手家として三流なのでグツと我慢し、ベニは右の拳を強

く握りこむ。

まあ、ちょこまかと動くが良いわ、チキン野郎（15歳、以下略）一発。

そう、一発さえ当てれば、ベニは怨敵を確実に流動食ライフに陥れる自信があるのだーかーらー！（あくまで高校の部活動だという意識がひたすらに低い空手少女の図）

とにかく、ベニの取るべき戦法は決まった。

防具を装備しているとは言え急所に食らうのはプライドが許さないので、頭部を狙ってきた攻撃だけを正確に捌き、それから接近してきた相手の身体をガードごとフルスイングで叩く。体勢が崩れたところを詰めて、トドメを刺す。これで決まり。これで殺せる。

さあ来い間山慈恩！ 名前がガンダムみたい！

と、迎撃意識を奮起させたベニだが、厄介なことに、先輩のスピードはかなりのもので、また脅威外としていたリーチについても見くびっていたようだ。

間山慈恩の次の行動はモーションからすると前蹴り。

彼は一メートル半あった間合いを踏み込み、ベニの腹部の、保護された部分を正確に狙って蹴り込んできた。

でも、ベニには見えている。

先輩男子の前蹴りに対して後ろへは退かず、自らの左腕を回して払い落とした。距離を開けたくはなかった。反撃できなくなるから。『（あたしの番！）』

ベニはそう思いながら、前蹴りを凌いだことで隙だらけとなった間山慈恩の脇腹に殺人フックを味合わせてやろうと、一步、深く踏み込んで

かつーん。

乾いた音が頭の中で響いたようだった。

正確には、それは、ベニが被った面包に何か硬い物が当たったような音色であり、しかし衝撃はまったくと言っていいほどに無かった。

直後、審判をしていた岩村主将が吠える。

「待てえい！」

『あによ……』

既に必殺の右鍵突き（0・2トン）を繰り返す体勢に入っていたベニは鬱陶しそうに主将を睨んだ。せつかく敵の横腹を殴れるところだったのに。なんで止めんのよ、このイワーク。

しかも、

「白、上段蹴り、一本！」

とか言いやがった。

『はあああああ？』とベニ。

岩村主将は、いつの間にかちゃっかり中央に戻っていた間山慈恩の方へ、ブンツ、と小気味良く振って、ジャツジを唱えたのだ。

つまり彼の上段蹴りが決まったから、一本あげようね、と。

ベニは絶句。

一方、間山慈恩は何やら、頭の上に両手でハート型を作ってガニ股ポーズ。お猿さんの真似だった。うきき。ぶっ殺すぞシブくない方の間山！

よつやくベニは怒声を張り上げた。

『待てつつつの！ 蹴られたかもしんないけど、あたしノーダメー  
ジだし！』

おそらく、間山慈恩はあの時、払われた前蹴りをそのまま上段回し蹴りに移行させたのだろう。

器用だとは思つが、そんな踏ん張りの効かない蹴りに威力は生まれない。実戦的ではない。有効打の判定なんておかしい。

誤審であるとベニは抗議してみたが、しかし判定後は腰に手を当

てている岩村主将は首を横に振る。

「ダメージは関係ない。有効な部位に有効なフォームで攻撃を当てればポイントになる。そういうものなんだ」

『だからって一本？』

「上段蹴りは一本、3ポイントと厳密に決まってる」

『あーはいはいそうですか。もういいです。さっさと、続き、始めてください』

視界の狭くする面包の中で唇を尖らせて、ベニは試合の再開を促した。だいたいこんなもの付けてなきやさっきのトリックキックも見えてたもん、絶対。おまけに勝負三本ってなんだつつうの、実戦空手じゃ一本勝負だつつうの、なんですか、命が三つある設定ですか、残機数ですか。

イライラし始めたベニ（残機2）の耳に、ギャラリィをやってるモブども、空手部ヒラ男子どもの声援はいつそう耳障りに感じられた。

「いいよいよベニちゃんドンマイ！」

「動きキレてるう！」

「間山の刻み上段かわす女子なんてヤバヤバっすわ！」

うるさい、凡夫。端から順に消えてっつね。気が散るから。

あたし、こんなもんじゃないし。

いくらセコい蹴りでポイントをリードされようとも弓楯ベニの最大の魅力は一・撃・必・殺。

相手を死に体（再起不能）にしてしまえば良いだけの話だ。そうすれば三本も取る必要は無し。所詮、八子が何度刺そうが像を殺せないってことをその身に教えてあげる……ア、アフィ、アナ、ア、アフィナリシシーショック？ とか絡んでくるとよくわからないですけど。下手な喩えでしたらすみません。

……どうでもいいの！

とにもかくにも、今、ベニの精神的コンディションは最高潮、それこそ中学時代に宵蝉館を制覇した時の闘争心に近づきつつあった。

『弓槻さん、やりにくい？ 続ける？』

と、間山慈恩に訊かれたら、真っ赤な顔して何度もブンブン頷く。  
『別に。大丈夫です』

そうして、組手は改めて仕切り直される。

ベニのやる気は満々だった。真正正銘「殺る気」と書くほどにみなぎっていた。まったり行く気だったがもう殺す。ぜひ殺す。

昨晚、師範である間山閑空に珍しく誉めてもらえた通り、ベニは自分に対して絶対的な自信を持って生まれた女の子なのである。誰が相手でも、どんなルールでも、空手という土俵の上で負けるつもりは無い。たとえ、相手が師範の弟だつて関係無い。

15歳、少女の負けん気は強かった。

だけど、しかし。

「始！」

『先輩どうぞ死んでくださいッ！』

「待てえ！ 待て待て待て！ 赤、下段蹴り、反則！」

いきなりローキックを放ったベニに対して主審の岩村はぐるんぐるんと手を回した

間山慈恩も、周囲の男子たちも皆、腹を抱えてゲラゲラと爆笑していた。

『反則……どこから、反則？』

ベニは、少し、ほんの少しだけ萎えそうになった。

静電気を恐れるように。

鴻池は一秒も経たずしっとりとした唇を離したが、コウは彼の太股を強くつねった。

「……痛」と鴻池。

「ないよね？　そういうの。いきなり」

さすがに笑顔を失ったコウがじっと睨んで言うと、鴻池は視線を外した。つねられた太股に手を当てて押し黙ってしまった。

コウは溜め息をつき、「……ごめんね」と、自分からも謝った。

「あたしも悪い。かわいって、言ってくれて嬉しいです」

居心地の悪さに帰りたくなかったが、それだと鴻池に悪い気がしたので彼の言葉を待った。

一分ほど沈黙が続いた後に、顔を下げた鴻池の声が聞こえてきた。

「本当、ごめん」

「いいよ」

「別に、お前を、軽そうとか、そういうふうに見てたわけじゃないから」

「いって。気にすんな」

コウはぎこちなく笑うと、見るからにへこんでいる鴻池の肩に軽くパンチした。動揺は自分も確かにしているので、リュックを漁ってラッキーストライクを取り出すと一本くわえてさっさと火を点けた。

そのあたりで鴻池は顔を挙げた。

彼が「不良だな」と言ったのでコウはやっと安心することができた。眼鏡は相変わらずお借りしたまんまだ。

「これだけ言いたい」

「んー？」

「キスは勢いだけど。好きだから。ムツダのこと、ちゃんと」

コウは激しくむせた。

「いや、今日とか、誘って、少し話せたらいいかなって程度だったんだけど。梶田とかにも助けてもらって。でも、駄目だな、俺。思ったより理性弱くてシヨック。ほんと、キモいことして悪い。やっぱりカラオケ代も俺が払うよ」

咳き込んだせいなのかなんなのか、目元がじんわりとしてしまったコウは、ロクに吸うことなく煙草を擦り消した。

「……いや、キモくないから、ぜんぜん。もう謝らなくていいって。鴻池くんに訊いていい？」

「うん」

「なしてあたし？」

まだ入学式から一週間分の日数しか終わっていない今日、鴻池とは学校でも二、三度の浅い会話を交わしただけだ。メアドは知ってるがメールの交換は未だゼロ。あたしの魅力はまだまだ発揮しきれてないぜ、とでも冗談を言いたくなるほど、寝耳に水の出来事だった。

鴻池は「んー」と考えた後、

「一目惚れ、つうか？ 初日から森田とかと騒いでたじゃん。馬鹿みたく。なんでかわかんないけど、あれ見て、ああ、かわいいな、って思ってた」

「訊いといてごめん。やめて。死ぬ。はずい」

自分でも赤くなってるわかる顔を冷やすように、コウはカラオケルームの壁へ額を押し付けてグリグリし始めた。決して悪い意味ではなく、身の毛がよだつほどに恥ずかしかったのだ。

これまで「コウは馬鹿だなあ」「ムツダは元気だなあ」「うるさい女だなあ」「あたしって可愛いよね、可愛いでしょ、と訊いても「はいはい」と、ずっと、そんな感じで扱われ続けてきたためか、鴻池のように真顔で誉められることに耐性が付いていなかったのかも。自分の意外な弱点を今日見つけた。

オデコで壁を掘ろうとしているコウを見て、鴻池は笑っていた。

「俺さ、小学校の頃から、中学の時も、そんなに女の子を好きとか感じなかったんだけど。案外、変な奴が好みだっただけかもな」

「あたし、ゲテモノっすか」

「いや？ 知らない。半端なく可愛いと思うよ。少なくとも俺は「んだから真顔でゆうなッ」

真顔で誉めるのヤメテ！ 破裂する、羞恥心とか、そういうものが。そろそろ本格的にコウの目に涙が滲んできた時になって、少し疲

れた苦笑をした鴻池がすくつと立ち上がった。

「出ようか。道わかんないなら、駅まで送ってけど」

「あー、うん、自信ないかも。お願いします」

「眼鏡は返しなさい」

告白について返事を聞かない方針でいくらしい鴻池を見て、一瞬コウはホツとしてしまったが、卑怯っぽい考え方だと気付いて少し哀しくなった。かと言って、余計なフォローをするのもどうかと思った。

眼鏡を返した後、フロントでの会計はコウが払った。そこは意地でも奢るつもりだった。もしも鴻池に払わせてしまつと一時間の室料がキス一回分になってしまいそうで、くだらない事だが、そういうのは嫌に思えた。まだ日は浅いけど、鴻池のことは良い奴だと認めていたからだ。

帰り道は紅色の夕焼けだった。

どちらのペースかわからないけど二人ともゆっくりな足取りで駅へとぼとぼ歩いていった。

「やい、鴻池、やい」

カラオケ店を出てからコウは久しぶり口を開いた。

「ん、何？」

「春休みから、あたしすっげえモヤモヤしてるんだ。ゲロ吐きそうなくらい」

事実、昨晚、ランニングから戻った後にコウは胃の中を戻していた。それを知らない鴻池の横顔は、肩を揺らして笑っていた。

「ムツダも大変だな。モヤモヤの原因は？」

訊かれてもコウは、わずかに逡巡した拳句に答えなかった。

「それは秘密のアッコちゃん」

「あ、そ。なら、解決策は？」

「無い。我慢するだけ」

「忘れちまえば」

鴻池はそう言った後に「あー、いや」と呟きながら立ち止まった。そこに立つ電柱の、高い所にある標識を見上げるような恰好で呟いていた。

「て、無理だよな。だから悩んでんだもんな」

「いいよ、真面目に考えなくて。鴻池くんの言う通り、そのうち忘れれば済むことだし」

「モヤモヤするとか、愚痴あるなら、ちゃんと森田とかに相談しろよ」

「うん」

そこで「俺が訊いてやる」とか言わないあたり、鴻池らしいと思いきや、彼は表情を綻ばせた。彼の人となりは今日一日でも充分に知ることができたような気がした。基本的にはクールでも、ところどころで優しかった。だけど最後に暴走しちゃうあたりがかわいい奴。

でも、今の気持ちのままだとコウは、誰とも、どんなに時間をかけても付き合っことなんてしたくない、と決めていた。

恋なんて、無理。だってもつたいない。きつと『モヤモヤ』に邪魔されて、物事の感動は半減してしまうんだ

実は、とっくの昔から、怪人モヤモヤの正体を知っていた。

「危ないって」

鴻池にブレザーの肩をクイクイと引つ張られて、コウは自分が路傍に空いたドブに入水しかねない歩行を辿っていたことに気が付いた。

と言うか、もう片足が半分浮いてる状態。

「おうっ」

バランスが危なくなった所で鴻池に腕を掴まれて引き戻された。彼は呆れた顔を浮かべていた。

「ナーバス？ 俺の勝手なイメージだけど、ムツダって明るい奴だろ」

隣にある顔へ、コウは、にへらっと笑い返した。

「ううん。明るくない。怪獣ヘドラよりドロドロ」

「なんかお前、怪我しそうで怖いな。帰りは気を付けろよ」

鴻池は優しげな感じで微笑んだ。何故かコウの顔は一気に熱を帯びていった。

ベニにとってはまるで悪夢のような時間であったとも言つか。

フック、反則。

膝蹴り、反則。

肘鉄、言うまでもなく反則。

それだけならばまだ理解可能だが、何故かベニが普通のストリートを打つても普通の上段蹴りを放つてもことごとく「反則」だと言われるし、猿みたいな間山弟には全て避けられるし、相手の攻撃だけがポイントになっていくし。

なんかあたし、絶対イジメられてるし……

最終的に組手の試合は途中でベニがマジで泣き始めたため、男子たちが大慌てして、中止の方向で幕は下ろされた。

これにブチギレたのは泣かされた本人ではなく、その友人の百合子である。

「陰険！ 最低！」

試合中にマツトの中央で動かなくなつたかと思えば急に「………ひいひいひいひいひい」とマジ泣きを始めた弓槻ベニの面包を外してやり、今はその頭を抱き締めてあげている船山百合子の表情は、普段の温厚な雰囲気とはかけ離れて険悪なものになっていた。隣でベニが彼女の胴着に顔を押し付けてグシグシとしていても構わず先輩たちに怒鳴っている。

「ルールの違いもロクに教えないで、ベニばかりに反則反則つて！」

「いやあ………」

主に反則を連呼することになってしまった岩村主将は、頭に手を置いて難しい顔をしていた。

「悪かったとは思うが」

「冗談じゃない！ ベニだって女の子なんですよ。それに、プライドがスカイツリーよりも高いのに………こんな仕打ち、はつきり言つてイジメです。すごく不愉快」

「………うひいひいひいん（慰められたせいで余計に泣けてくる子の声）」

泣くわ怒るわで忙しいことになっている女子たちに、男子部員のほとんどがオロオロとしていたが、ただ一人、ベニが泣き始めたあたりで「俺、知らねー」とでも言うように口笛吹きながら面包でお手玉をしていた二年の間山慈恩が、ここでようやく口を開いている。「はい、俺が主犯です。弓槻さんは甘やかすなって言われてるし。兄さんから」

彼の発言に、ぐすり、ぐすり、と鼻を鳴らしていたベニが充血した目をそっと上げた。「………師しゃんが？」と七歳児のごとく。

しゃくりをあげる声に慈恩は首肯して、それから彼は眉間に深い縦筋を作り出した。どうにも兄である間山関空の顔真似であるらし

い。

「挫折は早いうちに味わつとくといい、ってさ。ぶつちやけ、こっちの空手だと弓槻さんが得意にしていること何一つ役に立たないから」

百合子がキツと、長い眉を吊り上げた。

「何一つなんて、そんなこと、あるわけない……です。ベニは凄いなだもん」

すると慈恩は、格下の弁護士を労る検事のように一笑した。

「まー、動体視力の良さとか、勝負根性の強さってのは武器かもね。でも、もしかしたら、ある意味で素人よりタチが悪いかもよ、弓槻さんの場合？」

すっかり幼児化しているベニは友人の胸にミンミンと隠れ、百合子は友人を抱きながら先輩に警戒の目を向け、そして間山慈恩は胡散臭いほど陽気で愛らしい笑顔を浮かべた。

「剛腕なんだってね、弓槻さん。試合の組み立てがダメージ中心理論、て言うか肉を切らせて骨を断つ的な？ 極真流とか、実戦系は我慢比べなところあるからしょうがないけど。フルコンに慣れきった人間が高校から空手競技をやるのは、結構きついと思うなー」

ベリベリ、と両手に付けた拳サポーターのマジックテープをはがしながら慈恩はざらっと説明している。最後に、ほがらな口調を維持したまま言った。

「やめとけば？ 向いてないと思うし」

「てめえ間山！」

と、一斉に二年生へ蹴りを入れたのは主将を除く空手部の男子一同である。

「女の子になんて言い草！」

「お前がいつそヤメロス王子！」

「こいつ絶対ガキの頃に気になる子イジメてたタイプだ！」

「ベニちゃん気にすんな楽しくやろっ！」

「そっだマツク行こう！」

と、仲間たちにガスガスと肩パンをもらっている慈恩は大して堪えていないような顔で苦笑している。「いてて。痛いなあ。やめてくださいよー、先輩ー」

そこで岩村主将が「まあまあ、お前ら」と、両手を挙げて自己主張をした。

「確かに酷な事をした。弓槻、すまん」

彼は頭を下げた後に、こうも付け足した。

「ただ、間山が言うことも一理あるとは思う。実戦派の癖を落とすのには苦労が必要だぞ」

相変わらずグズっているベニは蚊帳の外で、本人に代わってムツとし、主将に質問するのは船山百合子の役目だった。

「あたしも大して組手知らないんですが」「む?」

「ベニがちゃんと突きや蹴りを打った時でさえ反則なのは、どうしてなんですか?」

「振り抜き過ぎだ」

岩村主将は即答した。

それに慈恩が爽やかスマイルで補足している。

「建前は《寸止め》だからね。引き手、引き足がしっかりしてない攻撃は危険行為なの」

百合子は溜め息をついた。

そして彼女は、友人の手を握り、迷子を見つけたデパート嬢のように相手の顔を覗きこんで尋ねる。

「ベニ? どうします、帰ろっか?」

「……………」

ベニはしばらく俯いて過ごしていたが、やがて百合子の体からすつと離れると踵を返し、そのまま一人で第二体育館を出ていった。まった。一部で「ああ……………」と落胆が漏れていた。

残された百合子は一度、男子部員たちに首を向けて、

「そういうことなんで、今日のところは帰ります。ご指導、ありが

とつございました」

一時は憤怒を見せたが最後には礼儀正しく頭を下げた下級生に、  
間山慈恩がヒラヒラと手を振る。

「いえいえー。俺も楽しかったっすよ」

「最後に、いつこ」

と、百合子は前に進み、岩村主将に間山慈恩と連続で、にわか  
に彼らの頬を強く平手打ちした。

ドラマよりもずっと鈍い音が体育館に響き渡り、周囲の男子たち  
が啞然と口を開ける中、泣きボクロの女の子は冷たい表情で淡々と  
言う。

「ごめんなさい。あたし、基本的にベニの味方ですから」

早速赤くなり始めている自分の頬を押さえて、間山慈恩は愉快そ  
うにニツと口元を緩めていた。

「いやあ……君も君でスジが良さそうだね」

「格付け報告板」

今日は空手部の練習にB・YとY・Fの二人が参加してくれた。  
諸事情は割愛するが、うちの奴らが二人、Fちゃんの方にビンタ  
食らっていた。なんか見えていてゾクゾクした。良い意味で。

あーあ、空手部入ってくんないかなあ……

「相談板」

今年の空手部うざいな。手堅く物件集めてやがる。

ら。

森田瞳の演劇部か木村麻子のバスケット部以外は全て負け組ですか

嫉妬乙。

エントリー嬢二人ゲットは美味しいだろ、どう考えても。

これで後一人、空手部にエントリー嬢が行ったら俺、空手始めるわ。

俺も俺も。

お前らw

あと一人って、もう帰宅部は陸田の紅だけじゃなかったっけ？  
確か。

そうなのか。

空手部にダブル紅フラグ立った！

何が面白いのかわからん。

陸田紅は空手ってガラじゃないな。

空手ギャル………すごく、ビミョーな新ジャンルです。

そんなお前らに朗報。

『《陸田紅、山形、空手》で検索かけてみな。……………笑うぜ?』

ついには鴻池との間にある空気を曖昧にしながら、駅で彼と別れたコウは電車に乗った。

やはり、肩が楽になったのを感じて、逆に気分は重たくなった。はあ、やれやれ。どうしよう。自分の中で整理も付いていないうちに、新しいタイプの怪人モヤモヤまでやってきて、コウは少してんてこ舞いの状態だった。

ただ、同じモヤモヤでも、こっちの方はまったく嫌ではなかったけど

鴻池にキスされた今日は木曜日。

金曜日なら良かった。

週末の猶予をもらえるのなら、コウは鴻池と月曜日のクラスで顔を合わせても平気で接する自信があった。電車に乗っている今も、徐々にドキムネは収まりつつあるのだから、今夜あたり寝る時にもまた恥ずかしくなるかもしれないけど、たぶん土日を挟めば完璧に落ち着く事ができるはずだったのに。

おまけに、初代・怪人モヤモヤの方は一向に手強かった。

何せ、コウは《そいつ》を見てはいけけないのだ。もしも、怪人モヤモヤの、赤いマントが揺れる背中を指差してしまったら、きつとコウは泣き出してしまう……そんな確信があった。

だからコウは吊革をギュッと握りしめた。そして、たまたま車窓に「BOOKS」という看板を見つけると、次に停車した駅で迷わず降りた。

急に漫画が読みたくなつたのだ。  
底抜けに明るい奴が良い。

知らない駅でコウは勘を頼りに歩くと、ほどほどに大きい本屋は  
すぐに見つけることができた。

表の看板に背中を預けると携帯電話を取り出して山形のヨツチャ  
んに電話をかけた。何か面白い漫画は無いかと訊いた。漫画通のヨ  
ツちゃんは最近のお勧めをいくつか挙げたあとに『コーさん、お前  
なんか声やべえよ。元気ねーべ?』と突っ込んで来たので、まあな  
と答えてコウは笑った。

三十分ほど関係ないこと話してコウは旧友との通話を終えた。  
そして本屋に入ろうとした時、入り口で気になる二人組を見つけ  
て足を止めた。

コウが通う花見坂高校のブレザー服を着た女の子たちで、しかも  
一人は見覚えのある顔だ。

「……あ」

と、手動のガラスドアに手をかける所だった彼女も、近くに立つ  
コウの存在に気付いて首を回してきた。

そうしてコウは、わずかな間、友だちを連れた彼女、弓槻ベニと  
静かに視線を交わし続けた。

「ちいっす。ベニちゃん」

名前だけは知っていたので、基本的に人見知りと言う繊細さとは  
無縁のコウは片手をひょいっと挙げてみた。

生まれつきなのかもしれないが不機嫌そうな顔立ちをした弓槻ベ  
ニは、書店の入り口に佇み、片方の眉をかすかに上げる。「は。ベ  
ニちゃん?」

彼女は、男性用ワックスで無造作スタイルにセットしたような髪型が自然と似合っており、中背だけど、丈詰めスカートから長く伸びた股下は細くも健康的、コウはそこに一番驚いた。なんだこの美脚。

「ベニ、お友達？」

と、脚タレ、もとい弓槻ベニの、友人らしいボブカットの上品そうな女の子が相方の方へ首をかしげていた。

コウは笑いながら手を上下させる。

「あ。こっちが一方的に知ってるだけでしたー。ごめん」

「……陸田紅さん、でしょ」

「おお？」

弓槻ベニの方からボソリと、自分の名前が聞こえてきてコウは目を真ん丸くした。あたし名前教えたって？ と、お脳の記憶を掘り返してみたけど、そんなことはなかった。

「アンタのクラスの市川に聞いた。同じ名前だって。それだけ」

おお、イッチーにか、とコウは納得した。

「あと、ベニやんとかやめて。ウザい」

虫の居所が極悪な位置にあるっぽい面持ちでコウに釘を刺すと、弓槻ベニはガラス戸を押して店内に消えていった。

こええ。

その後、お友達の方は苦笑いを浮かべつつ「ごめんなさい」と、コウの方へ両手を合わせた。会釈もしてきた。

「あの子、イライラしてて。八つ当たりだと思えますから」

フォローを済ませると彼女も弓槻ベニを追って店内へ。

未だ一人、店外に立つコウは腕組みをすると神妙な顔で独りごちた。

「あるよねー、イライラ、モヤモヤ。わかる。すっげえわかる」

うんうん言いながら本屋のドアを押し開けた。

……………うぜえ。

先ほど空手部で辱しめられて、ただでさえ普段の倍以上に人相が悪くなっているベニの殺意は、今は主に本屋で偶然に出会ってしまった陸田コウに向けられることになった。

と、言うのも、

「へー！ じゃあ二人ともこの駅住んでんだ」

「うん、小中高って一緒だったよ。でもクラス被ること少なかったけど」

「幼馴染みなんだねー。もう互いに性感帯知り尽くしてる的な？」

「ん、と……コウちゃん、そういうの、あたし苦手」

「あ、マジすまん。百合ちゃんはそっち系NGか。了解了解。うわ、本当に顔赤いし、やべ、かつわいー！」

「うー、なんでだろ……。一応、興味はあるんですよ？ でも、人に聞かされると妙に恥ずかしくて……暑」

「むっつりだ。言葉責めしたくなんねワハハ」

「無理無理。鼻血出ちゃいますって」

何。

なんなの。

なんで後ろの方に陸田コウくっついて来てんの？ しかも百合子と良い感じに打ち解けてるんじゃないやねえし……

あの、神様って日替わり？

今日の神様は弓槻ベニを生理的に嫌ってる気がしてならないんですけど。

と、まあ。

十分前からそんな状況が始まっており、機嫌最悪のベニは実に様々な細かい箇所が目が違って、その都度、やり場の無い憎悪が募る募る。

例えば、今いる雑誌コーナー、購読中のminiを読んでいたベニは、そっちで陸田コウがsoupを手に取ってるのをチラ見して「てめえはPopTeenだろツ」と何故かムカついた。向こうで百合子がターザンを読んてるのも意味不明だが、それは許す。

あー、死にたい。

と、虚ろな目で雑誌をパラパラめくっているだけで、まるで読んでいないベニの状態だったが、しかし、わりとあっさり瓦解するものであったり。

「ベニちゃんベニちゃん」

おもむろに陸田コウが雑誌のバツと大きく開いてきたので、ガン無視態勢を決め込んでいたベニも思わずそちらを見てしまった。

陸田コウはページの中的特集モデルを指差して、

「このアリスって子、ベニちゃんに似てない？ きりつとした目とか、ちょっと和みかけた。

や、やだあ。

あたしってばそんなハーフっぽい顔してる？ てゆーか、モデルを掴んで似てるなんて初めて言われたけど、何さ、尋常じゃなく嬉しいじゃない。何さ。

と、ガン無視態勢の方はあっさりと瓦解してしまった。

「ベニちゃんはエクステとか付ける人？ すげえ似合いそー」

「……中学の時に一回。微妙だったけど」

ベニが（お慈悲で）答えてあげると背が高い陸田コウは、自分のウェーブヘアをふわっと持ち上げてニコニコしている。

「そうなのかー。あたし土日にもママと恵比寿行く予定だったからさ、付けてくるかも。似合うかなー？」

「あんだ髪の色明るいから、絶対浮くって」

「あ、そっか。うげえ、しまった。まるで自分が見えてねえや」  
今度は見るからにしょんぼりとしている。

改めて向き合ってみると、陸田コウはかなり感情表現が顕著なタイプなのに、飾ってないと言うか、不思議と嘘臭さが伝わってこない。自然体でこれなら中身は相当な馬鹿だろう。ただ、ベニとは違い邪気とか少なそうだ、うらやましい。

数分前まで高かった警戒心も、ほぐれつつあるベニがいて、ついには自分からも会話を始めていた。

「ナンバガ好きなんだって？ 陸田さんのママ」

「んだじゅ。よく知ってんなあ。スパイ？」

「いや……、だってあんた、自分で言ってたでしょ。昨日」

「んだじゅー？」

「何それ。オタク言葉？」

「山形弁だじゅ。使い方はノリだじゅ」

ああ、そう言えば田舎の出身だったかと、ベニは格付けサイトで見た情報を思い出した。上手い具合に垢抜けてるもんだからすっぽりと忘れてた。

今日会った時から明け透けと浮かべている陸田コウの笑顔を見ながら、こいつ、悩みなんで少しも無さそうだな、と少々呆れてしまふ。いや、憧れたのかもしれない。

それから、和気藹々ではまったくないが、書店で陸田コウと毒にも薬にもならない話をしていたら、どこかに消えていた百合子が戻ってくる。

「ねえ、ベニ、これ買おう。一緒に」

と言って、彼女が差し出したるは文庫サイズのルールブックであり、隣にいた陸田コウが「オウ、カラテー」と外人っぽく言うている。

まさかベニは、それを見た瞬間に自分が鳥肌を立てると思っていなかった。ゾワゾワワワ。キ、キモい！　なんかその本キモい！

「い、今すぐ燃やしてしまえ。そんなお遊び空手の本」

「気分良くないのはわかるけど。ベニ、まずはルール、覚えよ？」

優しい口調で提案する百合子から、ベニはしかめっ面をプイリと背けた。

「いい。いらないうって」

「どうして」

「空手部入るのやめる」

「逃げるんだ」

ぎょっとしてベニは顔の正面を友人に戻した。

「どうして、そんなこと言うわけ？　ひどくない？　ひどいと思う

……」

傷付いたことを主張してみたベニだが、しかし百合子お嬢様は泣きボクロをちつとも動かすことはなかった。冷静な表情で言うてる。

「甘えないでね。あたし、真面目に話してるんだもん」

「……………」

隊長、不利な状況であります。

理由はよくわからないけど、百合子さん、軽くキレてらっしゃいます。

ベニもよく怒っているが、逆に他人から怒られるのはすごく苦手であった。だって怖いもん。今の場合、ベニは百合子に対して何の不満も持っていないため言い返すにもパワーが足りないし、又、百合子と口喧嘩なんかして嫌われてしまうのは嫌だった。

「…………百合子ヤダ。見捨てないで」

「そういう話は、今してないんだけどなあ」

いつもの牙も剥けずに畏縮し始めたベニに、口調はずっとおっとりしている百合子は渋い笑顔を浮かべている。彼女はブレザーの上から自分のお腹をポンポン叩いた。

「ベニの自由だと思いますよ。でも、あたしは空手部に入るね。昨日、そう決めまし、あたしには辞める理由が無いもの。ダイエツトしたいのは結構マジだからね」

「なにになに百合ちゃん、隠れお肉プニプニ？ あたしと同盟組む？」と、全力で馴れ馴れしい陸田コウに背後から抱きつかれた百合子は「きゃー、やめてーッ」と冗談っぽく笑っている。

ベニは呆然と立ち尽くしていた。なんか、うち、仲間外れみたいやん……と関西弁で呟いてみたが、到底誰にも聞ききとれない程度の声量だった。

ヒドイ。

今日という一日はどこかヒドイ。高校の空手道は漫画パンチ禁止の安全第一みたいなお遊びルールだし、その空手部の連中からは陰険なイジメに遭って笑いにされるし、おまけに、味方だと思っていた百合子までもが敵（空手部）に寝返るなんて。

なんでこんな惨めな想いばかり続くのだろう。

「ねえベニ、悔しくないかな？」

意識が泥沼化しかけていると、後ろにギヤルを背負った恰好の百合子が真面目な顔で言った。

「あたしは悔しいよ。ベニが空手に向いてないなんて言われて。そんなことないもの。ちよつとルールが違ってても、ベニは強いんだって見返してよ。これ、あたしの希望です」

じーん。

としてベニはきゆうつと唇を結んだ。今さっき、百合子が裏切ったとか、みみっちいことに思考力を費やしていた自分が情けなくなつて涙腺がじくじくと痛みだす。だけど空気を読まずに陸田コウが「仲人、必要ですか？」と水を差してくれたおかげで涙は一瞬にして引いた。ある意味で感謝。

「じゃあ、入る」とベニはあっさり言うことができた。

「百合子の希望なら断れないし」

素直じゃない。我ながら。

「吐くかも」

いきなり、書店のフロアで陸田コウがお腹を抱えてうずくまったのは、ベニが百合子と一緒にレジで空手のルールブックを買った少  
し後、ついでだからと雑誌コーナーに戻り伝統派空手道の月刊誌を  
立ち読みしていた時。若い世代の空手家特集で、1ページを占領し  
ていたベニと同年である少女の名前が目について「これ、なんて  
読むんだ？」と話題にしていたら、途中で陸田コウが物騒な予告を  
して沈没したのだ。

ベニは驚き、すぐさま陸田コウの正面にしゃがみこむと具合を尋  
ねた。

「ちよつとツ。陸田さん、大丈夫？」

「マジでゲロしそう」

ひいっ。

陸田コウは口元を手で隠し、結構つらそうにしていた。ちゃらん  
ぼらんとしたギャル娘の顔色は青ざめてるようにも見える。ずっと  
元気そうだったのに、実は体調が悪いのを我慢していたのだろうか。  
百合子の心配そうな声が聞こえてくる。

「ここ、トイレ無いよ。隣がドトールだけど、行きます？」

「もう、平気」

すくつと立ち上がった長身の陸田コウ。

しかし、グラリと盛大によるけたためベニがその身体を受け止め  
た。決定的に気分が悪そうな彼女はベニのブレザー服に顔面を押し  
つけモゴモゴしている。

「ごめえん、立ち眩み……………て、ベニちゃん、細いのに、なんで、  
こんな……………嘘だろ？」

「揉むなつつつの。あんだ、ぜんぜん平気に見えないんですけど」  
向かいでは百合子が、鞆から携帯電話を取り出した。

「今、家にお母さんいると思うし、車で送りますよ？ コウちゃんち、駅どこ？」

緩慢に頭を振りつつ陸田コウは、ベニからよろよろ離れた。

「いい。ありがとね。ちよっと、寝不足なだけっす。君たちは空手の練習がんばって」

と言うのでベニは溜め息をついた。

「空手関係ないっしょ、今。せつかくだから乗せてもらえばいいじゃん。百合子んち、ハマーだよ。陸田さん乗ったことある？ とゆーか山形にハマーある？」

「失礼だよ、ベニ」

「ジョークじゃん」

「あと、お母さんはハマー使わないよ。あれは遠出用だもん」

「だったら何さ。アウディ？」

「知らない。教えない」

お嬢様がヘソを曲げる気配がしたのでベニは突っ込むのをやめて、口数が少なくなっている陸田コウの方に目を向ける。

「またもや口を押さえて、苦しそうにしていた。」

胃が痙攣でもしたのか、一度肩を跳ねさせて、ぎゅっと瞑って堪える目元には涙が滲んでいるようだし、うーん、やばいでしょ、明らかに。

本格的に吐くかも。

ドトール！ ドトール！

とりあえず送るのは後回しにして休ませた方が良く判断が一致したベニと百合子は迅速かつ静穏な進行で陸田コウを喫茶店に移動させた。

セーフ。ぎりぎり。ガチで。

陸田コウがオエーっと限界を迎えたのは、ベニたちが彼女をドトールの化粧室へ連れ込んだ直後であった。必死で我慢してくれていたのかも。

甲斐甲斐しい百合子に背中を擦られ、それでようやく落ち着いたのか、トイレから出た後、四人席のソファ側で横にさせて、今は静かにしている。

百合子の母親に連絡を取って、高級車で迎えに来てもらえることになった。ただ、先方の都合で三十分ほど時間がかかるのだそうだが、病人連れとは言え、タダ席に居座るのも後ろめたいので、ベニはカウンターでドリンクを注文してやることにした。

「百合子、陸田さんをヨロシク。何飲む？」

「ホットのカフェモカ、M。ありがとベニ、お願いします」

「そんなん飲むから太ん……………りょーかい」

「最後まで言えば良いじゃない」

「陸田さんわッ？ 飲みたい物！」

失言を聞き逃さなかった百合子が浮かべる笑顔から逃れるようにベニが訊くと、こっちに尻を向けて寝ている茶髪娘は元気が足りない声を十五秒後に返してきた。

「エスプレッソお」

「胃を破壊する気かよ。オレンジジュースにしとくからね」

「愛してるよう……………」

ツツコミ待ちだったらしい。体調悪いくせに陽気な奴だと感心した。

それから、ベニが三人分のドリンクをトレイに乗せてカウンターから戻ってきてても陸田コウは未だにアザラシのような恰好でダウンしている。

ベニが届けたオレンジジュースにも起き上がる素振りを見せず、彼女は寝てしまったのかなと思っていると、約五分経って声が聞こえてきた。

「写真で見ると、キツツイなあ……………」

意味不明。

「どうしたの、コウちゃん？」

百合子が反応すると、陸田コウは寝返って顔を向けてきた。今まで、泣いていたらしい、目と鼻が真っ赤だ。

「見苦しいの見せちゃってさあ、ごめんよ。超感謝」

表情だけは平静としていて、第一印象のノリノリギャルとはまた違った雰囲気で言葉を漏らしていて、ちょっと色っぽいなと思いつつベニは右手をヒラヒラさせる。

「具合悪いんなら、しかたないでしょ」

何故か百合子が笑った。

「ベニが優しいこと言ってる。コウちゃん、好かれてるよ。気を付けた方がいいね」

「は。何それムカつく。意味わかんない」

ベニは頬の筋肉がビクビク痙攣しているのを感じながら、恥ずかしいこと言う幼馴染みを睨み付けていると、「くす」というふうな吐息が耳に。席で寝ている陸田コウは子どものような顔で笑っていた。

「あたしも、ベニやんと百合ちゃん好きだよ。今日、二人に会えてラッキーだな。迷惑かけちゃったけど」

「あつそ」と、ベニはカフェラテアイスのストローに口を付けた。なんか耳のあたりが重点的に熱くてキモい。

「はーあ」

陸田コウはようやくソファからゆっくり起きると、今度はオレンジジュースを寄せてテーブル上に身体を投げ出した。

会話もなく、百合子と静かに様子を見守っていると、やがて陸田コウは再び泣き始めていた。

すぐくへんな泣き方だった。両腕はまったく使わずに「うー」と呻き、涙を流しながら卓上で顔をゴロゴロと転がしているのだ。普段のベニなら露骨に嫌な表情を浮かべてヒいている所だが、今回に限って、ベニも二時間前に醜態を晒していたため、少し、同調して

しまつ。

「なんか、すげえマイってんなあ、あたし」

それからオレンジジュースをズイーとコップ半分くらい吸い上げ、赤い目尻を拭った。

「ゲロつたついでに、二人にかなりウザいこと吐くけど、いいかな。イヤダつつても漏らしちゃうけど」

ベニと百合子は一度顔を見合わせ、双方、頷いた。

「うん、いいよ。吐いちゃえ吐いちゃえ」

「あたしはウザかったらウザいつて言うけどね」

「ワハハ。やつぱ好きだなあ。やさしー」

陸田コウは静かに涙を流しながら笑うと、身体を悪くするほどに溜め込んでいたという一つの後悔を長く語り始めた。

「二人には意味不明かもだけど、ただの独り言だから。あたし、山形で、ダンスみたいなのしてたの」

「あたしね、最低なんです。対戦相手のこと馬鹿にした」

「大会で、わざと演技を失敗してたの。本気でやって負けるの怖かったから、わざと最後に転んで点数下げた。だって、あの子には絶対勝てないってわかってたから。ほんとバカ。死ねばいいのに」

「いつか、その子に勝てるんだって思ってた。地元一緒だし、大会は毎年あるから。そう思って、自信が付くまで練習して、絶対に勝てるって思った時に本気でやろうと思ってたの。いつでも挑戦できる、いつか、いつか……って。逃げてた。最後の最後まで、正々堂々負けようともしないで、言い訳ばかり作ってきた人間があたしです」

「それなのに……、その子、劉紅は言ったの。お前の演技、好きだ

ったよって……それが、それがね……、すごく嬉しくて、感激しちゃって、顔とか痛いくらい鳥肌が立った」

「でも、同時にさ、そんな時になって、初めて後悔した。今さら、ベストの演技で負けたいと思った。もう手遅れ。遅えよバカ。五日連続で夢に見るのもザマアミロだよ」

「あたしには、劉紅がくれた優しい言葉を素直に喜ぶ資格が無いの」「おかしいんだ。今は、何しても頭のどこかでモヤモヤしてる」

「逃げるのがこんなに悔しいって、知らなかった」

やがて、迎えに来た百合子の母親が運転ひくよかしていたのは落ち着いたオレンジ色を身に纏うステーションワゴン、アウディではなくBMWだった。三人の女子高生が高級車の後部座席に乗り込む時、百合子が何故か恥ずかしそうな表情でベニへと振り返り、わざわざ言い訳をしていた。

「これ、中古車だからね」

車上に移り、未だ少し体調が悪そうにしていた陸田コウはそれでも笑顔で「嵐だと誰が好きー？」と、どーでもいーことを訊いてくる程度には元気そうである。空元気かもしれないけど。

ベニは「いない」と答え、百合子は結構考えた後に「二宮くんを選んでた。陸田コウは「そっかそっか」。あたし相葉くんだなー」と満足そうにしていた。そして、しばらくすると彼女は、百合子の肩に頭を預けて短い眠りにつき始めた。

ベニは思った。

この女、神経が太いのか繊細なのかよくわかんない。

「なあ、陸田紅さんって、お前と話する？」

夕食時、食卓を囲んでいる兄貴もといエロメガネに質問されることになったベニは、一瞬、シカトしようか悩んだがコロツケを一つ食べ終わる頃には考えが変わった。

無視しようにも、出てきた名前があまりにもタイムリー。

うちのエロ兄貴がどうして陸田コウに興味を持つ？ ああ、エロだからか。百合子の次は陸田コウにも目を付けたか、このエロサピエンス。おお、イヤダイヤダ。

内心では悪態を蠢かせつつ、しかしそこに居る父と母が雑言に口煩いため、ベニはイイ子ぶって兄に普通の返事をしてあげた。

「まあ、ちよつとはね。話するようになったよ。いかにも、チョリッスって言いだしそうな子。でも山形出身なんだって。まあ、いい子だと思うよ」

「お前さ、空手部に入ったじゃん」

「は？」

いとも簡単に、ベニの眉間はビキッと実際の音を立てて引き締まった。母親に「ベニ、顔」と注意されたがイラついてしまったものはしかたがない。

陸田コウはどこに行ったの？ せっかく可愛い妹が話題に乗ってあげたんだから、もうちよつと上手く会話しろよ、メガネ。

金輪際見下す覚悟を決めている兄貴にスルーされた上、会話の主導権を握られているとあつては果てしなくムカつくものだ。

会話をブツ切りにされた仕返しと言わんばかりに、ベニの態度は急速に冷めつく。

「あなたに関係無いでしょ」

「や、そうだけどな」

兄は、父親が観ている野球中継に視線を移しながら味噌汁を一口啜ると、またベニに顔を戻して「ニコ」と笑顔を浮かべた。普段よりも、ずっと、優しげに。

きゅん。

とはしなかった。まったく。

「お兄ちゃんその顔きもい」

素直に感想を伝えると兄は笑顔を潜め、一転して不機嫌そうに口を尖らせた。

「うるさいなあ」

ベニは母親が食器を下げに席を立ったことを横目で確認しつつ、さらに毒舌を滑らせる。

「怒らないでね。お兄ちゃんのこと大切だから言ってあげるんだよ。うん。マジきもい。ぜんぜん爽やかじゃない。一生涯笑わない方がいいね。みんな君から離れてく」

さすがにそこまでいくと大袈裟だと自分でもわかっているが、冴えない兄を口撃ないし攻撃するのはベニにとってストレス解消法的一种なので罪悪感など皆無。あー、こいつが兄でほんと良かったー、スタボロにこき下ろしやすいやすい人が近くにいて良かったー。小学校低学年の頃は空手を習っていた兄を友達に自慢していたような記憶もあるが、いつの間にならう、こういう付き合い方しか出来なくなっていた。

妹の毒舌を浴びたソウは、しばらく「んー……」と渋い目つきを向けてきたが、ある時に性懲りもなくまたニコリとした。

「まあ、いいや。俺、機嫌がいいんだよ。許してやる」

「知らねーし」

しかも「許してやる」とかスゲー上から目線だし。何様だつづつの。

言っとくけど、家族体系における年功序列的ヒエラルキーなんてあたしの知るところじゃないんだからねっ、いや、言わないけど。ちなみに今の呪文みたいなフレーズは中学時代に市川から伝授されたものだからベニにも意味の説明は不可能。よくもまあ、あの優等生である市川や百合子と同じ高校に自分が通えたものだ、と、当時全面的に家庭教師を勤めてくれた目の前にいるメガネくんの功績を

意図的に忘失しているベニは、どうでもよさげに訊いた。

「何かイイ事あったわけ？ 今週のマガジンの表紙が北乃きい、とか」

「俺はそんなセコい男じゃない。違っつて。もっと夢のあることだよ」

「はあ？ 夢。とか、寒々しいことを嘯きながら兄貴は笑顔のまま腕を組み、すっかり落ち着いた食卓に深く座り直すとフンフン鼻を鳴らしている。

「俺もなあ、今年はまだ受験勉強に励まねば思うとなんだか憂鬱だったけど。楽しみつて案外簡単に見つかるもんだな。ベニが妹で良かったよ。マジでさ」

なにこいつ。

「……あのさ、お兄ちゃん。そろそろ死ぬの？ 白血病？ 助からない？ 世界の中心でメガネー、って叫んであげようか。誰も助けないであげてくださいーい」

「ベニ、」と、穏やかな声が聞こえて、見れば父が少し怒った表情をこちらの方へ。「そういう冗談を言ったらダメ」

う。やべえ。調子に乗っている言い過ぎたか。

兄とは真逆に、父親のことはきちんと尊敬しているベニは皆目反抗心無く「ごめんなさい」と呟いて、父が再びテレビの方へ顔を戻したのを見計らい、兄に無音で「イー、だ」てな具合に歯を向いたイー、ダと言わずいぶん愛らしく聞こえるが、ベニはあらん限りの憎悪（逆恨み）を表現してみせたつもりである。しかし、どうにも今日の兄は余裕だか慈愛に満ち溢れているらしく、苦笑して肩をすくめるだけだった。

「とりあえずな、ベニに話があるんだ」

「あによ」

「うん。陸田紅さんって、空手部入る気無いのか？」

ベニはきよんとした。

「は。空手部？ なんでさ」

「いや、まあ、何か辞めた理由とかあるのかもしれないけど。単に入ってないだけだったらベニの方でさ、上手い具合に誘ってみてよ。そこは《紅繫がり》ってことで」

「待って待って。かなり意味わかんない」

「なんだあ、ベニ。もしかして陸田さんのこと知らないのか？」

赤いフレームだろうが「博士くん」とでも呼びたくなるほど軟弱な顔した兄はのんびりした調子で眼鏡を押し上げた。

「男子の一部で結構話題になってるんだよ。動画共有サイトに、たまたま陸田さんの中学時代の映像があつてな。あの子、黒帯だぞ？」

「えー。うそだよ」

とてもではないが、にわかには信じられない。

あんな、髪染めて化粧してピアスぶら下げゲラゲラ笑ってはオエーとゲロ吐くルンルンしたギャルが折り目正しく胴着を身に纏っている姿を即座に想像できるほどベニの右脳は優秀じゃない。

それに、今日、本人から中学時代の話をかされたばかりだ。

「だって、陸田さん言ってたよ、今日、中学時代はダンスやってたつて」

「え。おかしいな。マジか、それ？」

「あ、いや……ダンスみたいなこと……だったかもしれない」

ベニはもごもごといいながら視線を泳がせると、兄はパチンと指を弾いた。

「オーケー、納得。確かにダンスっちゃダンスか。山形大会の動画で、陸田さんがやってたのは《型》だし」

「型？ ねえ、その動画って、今見れんの？」

「おー、見れる見れる。ファイル落としたからiPodでも見れるやー、すごい。俺も昔は型の方が好きだったんだけど、次元が違うな。陸田さん、たぶん、そこらの高校生よりもずっと上手いぜ。パソコンで見るか、せっかくだし」

片付いた食器を積み重ねつつ楽しそうに語ると彼は、「ごっそさん」と腰を上げた。

「あー、今年の空手部は楽しそうだ。俺も入部してりゃ良かった。まあ、代わりに可愛い妹の青春見守りますか」

「なにヒトリゴト言ってるの。きもい。ついでにあたしの皿も片付けてよ」

兄に下げ物を押し付けるとベニは立ち上り、さっさとパソコンを起動させるために和室へと向かった。

(陸田コウも空手家か……)

もしそうだとすると、ちょっと嬉しいかも、と感じてしまい自然と頬が緩んでいく心地になった。微妙な友達と部活を共にしても微妙でしかないが、きっと陸田コウはベニとって微妙ではない相性を持った女の子だったのだろう。

夕方のドトールで、陸田コウが悩みを吐き出して泣いていた時、ベニは「めんどくせえ」「馬鹿みたい」とウンザリすると同時に、間違いなく、彼女に何か優しいことを言っただけだ。あげたい気持ちがあるのどこかにあった。ついには何も言えなかったけど。

明日、陸田コウに話かける口実ができたかもしれない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4237t/>

---

空紅 ~ KaratekaGirl-KURENAI ~

2011年8月21日01時07分発行